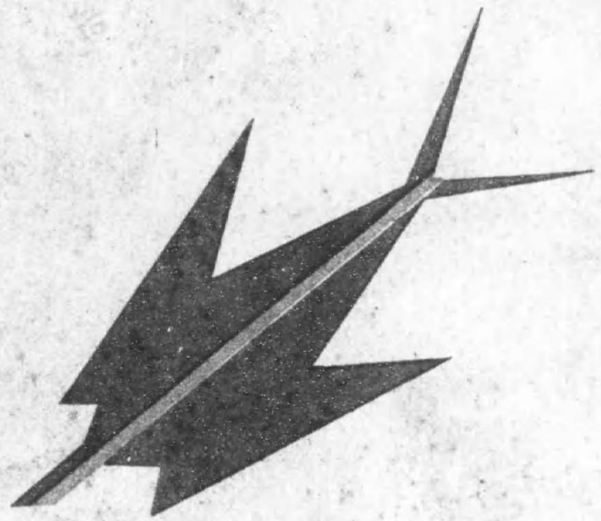
母なる大地



加藤武雄

始

特218
71

帝国図書館蔵

母なる大地

加藤武雄

文林堂双魚房版

帝国図書館

母なる大地・目次　起一頁

池の端の彌右衛門爺　起三頁
舊い家　起一六頁
みなしご　起二八頁
最後の者　起四一頁
女王　起五二頁
おとずれ　起六五頁
明眸　起七八頁

大震災　起八九頁
運命　起一〇二頁
憂愁の人　起一一五頁
愛難者　起一二八頁
母　起一四〇頁
山姥　起一五二頁
祖靈　起一六六頁
不死なるもの　起一七九頁

母の日　起一九五頁
魂まつり　起二二九頁
女性の道　起二六七頁
慈悲心鳥　起三〇九頁

母なる大地

—長篇—

裝

裝幀・淺見文吉

池の端の彌右衛門爺

あの關東の大震災も既に遠い昔の物語となつた。私の知人の子に震太郎といふのがある。地震最中に生れたので、それを記念して命けた名だが、その震太郎君がもう來年は中學を卒業するのだから、私共にとつては、まだ去年の事のやうに生々しく思ひ出されるあの大災厄も、若い人達には、もう完全に一つの「歴史」となつてゐるわけだ——。

まつたくあの時はひどかつた。私は、あの震災の日から十數日の後、上野公園の西郷さんの銅像の前に立つて、品川の海まで見通せさうな燒野原を眺めて心の底から溜息をついたものだつた。東京は滅びてしまつた！　それだけやつつけられてしまつては、東京はもう起ちあがる事は出來無いだらう。十年、二十年はおろか、五十年百年經つても、東京はもう決してあの繁華を取戻す事は出來ないだらうと、さう私は思はざるを得無かつた。

ところがどうだ、灰燼の中から新しい生命を得て、東京は不死鳥の如く舞ひ立つた。はじめのうちこそ、チヤチなバラツク建の上をぬりこくつたペンキの、あくどい彩羽の色彩であつた

が、やがて本建築となり、都市計畫となり、十年目にはもう、はるかに舊態を凌いで、萬世一系の天皇おはします宮城を中心に、新しい東京は、天晴東洋一の大都の威容をとゝのへ見せてくれたのだ。

こゝに喜びと誇りとを以て日本國民の氣魄と底力とを感じざるを得無い――と、何も今更らしく云はでも事だが、更に云はでもの事を云はせて貰へば、東京を起ちあがらせたその氣魄の底力も、それは日本全國の、土の下に潜んでゐたものなのだ。それが　天子様のおひざもとの東京にあつまつて、そして此の壯觀を完成したのである。

さて、このやうな前書は先づ措いて――。

あの大震災の時には二十萬の死者を出したその中には、私の知人も二人や三人は數へることが出來る。あの池の端の彌右衛門爺も、その一人だつたと云へる。

私が最初、彌右衛門爺をたづねたのは、その震災の前々年、即ち大正十年の六月初めの事だつた。

私よりずつと前に、東京に出て、それまで十年近い長い間全く消息を知らなかつた彌右衛門爺が、突然手紙をよこして、會ひ度いと云つて來た時、私はそれをまるで他界からの消息のやうに思つた。それほど、彌右衛門爺は私に遠い人になつてゐたのである。

（……貴殿××誌に御發表の小説「最後のもの」拜讀仕、今昔の感に堪へ申さず、就ては一度御目にかゝりその後の村の事共承り度くと存じ候。參上致度候得共、老衰の身歩行も自由ならず、誠に御無禮至極に候得共、陋屋に御光來を得ば幸甚に御座候。いつにても在宅致居候へどもなる可く夜分が宜しく……）

そんな手紙だつた。

私はその頃駈出しの作家だつた。「最後のもの」といふのは、私の二つ目か三つ目かの短篇で、池の端浚落後の一エピソオトを描いたものだつた。それが彌右衛門爺さんの眼にとまつたと見える。それにしても彌右衛門爺はまだ生きてゐたのか？　私がさま〳〵の感慨を胸に包んで、彌右衛門爺の家に出かけたのは、その手紙を受取つた次の日の夜であつた。

彌右衛門爺の家は螺殼町の何丁目かであつた。村で屈指の身上を耗つてしまつたのも一つは相場の爲めだといふ彌右衛門爺は、株屋の書記になりさがつてゐるとの噂を、ずつと前にきい

たが、矢張そんな事だつたのかと思ひながら、私は、幾度も人に尋ねたりして、横町から横町、露地から露地を探しあるいた末に、やうやくその家を發見することが出來た。

ごみ〳〵した横町から狹く折れ込んだ露地——その露地の右側に、こんなところにこんなものがと思はれるやうな小さなお堂見たやうなものがあり、その前に立てられた澤山の小旗が、お堂の奥の燈明のかすかな灯りを受けて、梅雨ぐもりの夜の、重い空氣の中にしのびやかに動いてゐたことを覺えてゐる。そのお堂を斜めに向ひあつた家が彌右衛門爺の家だつた。

「ごめん下さい。」

といふと、

「おゝ。」

と返事はあつたが、なか〳〵出て來ない。私は、がたぴしときしむ格子戸を引きあけて土間に立つた。土間の隅に、鉢植のさくろが置かれ、その花が内部からの灯に、夜目に眞赤に燃えてゐるのをながめながら、しばらくたつてゐると、煤け障子が引きあけられ、這ひづり出た一人の老人の顏が、その隙間からあらはれた。

「山岡です。」

と名乘ると、

「おゝ、邦夫か。よく來た。さあ、あがつて、くれ。」

請ぜられたのは、玄關の三疊につゞく八疊ばかりの一間だつた。その古箪笥や古葛籠などの雜然として置かれたきたない部屋、その部屋の型ばかりの床の間を背負ふて、背を曲げて坐つた彌右衛門爺を見た時、私は何かをむねに突かれたおもひがした。零落してゐるとはきいてゐたが、これは少し酷過ぎる。あの高い丘の上に城廓のやうに聳えてゐた池の端の邸宅を反射的に眼に浮べながら、私の顏は、ある表情を見せてゐたに違ひ無い。それを見てとつたらしく、彌右衛門爺は、

「は、は、」

と、とつてつけたやうに笑つて、

「池の端の彌右衛門も、此のざまだわい。」

「いゝえ、御丈夫で何よりです。」

「ところがな、もう私もいけぬわ。持病のレウマチでな。もう、わしもおしまひだ。」

——端正な顏の輪廓もすつかりくづれて、肉附はさうわるくはないが、眼も鼻も押しもんだ

やうにくしや〳〵になつてゐる。私の父よりも、私の死んだ祖父に近い年配だから、もう六十五、六になるであらう。その年齢にしても、すこし、老衰し過ぎてゐると私は思つた。

「お前は文學をやつてゐるのだな。お前の書いた小説を、お小夜が讀んでな。わしにも讀めと云ふから私も讀んだ。」

「いゝえ、つまらないもので。」

その小説の中には彌右衞門爺もモデルの一人としてちよつと顏を出してゐるのだが、私は彌右衞門爺をあまりよく描いてはゐなかつたので、一寸氣がさした。

「いや、なか〳〵面白いて。だが、何事でも一人前になるのは大へんだ。お前も折角文學をやるなら、馬琴のやうな作者になれ。」

「はい。」

「八犬傳のやうなのを書かにやいかん。お前の祖父さんも、下手な漢詩などひねくつてゐたが、まあ、お前の家にはいくらかそんな血統もあると見える。」

爺さん、あくまで高飛車だつた。慇懃すぎる位のあの手紙とは打つて變つた大柄さは、村の古老が村の若物に對するそれだつた。しかし、私は不思議に反感が起らなかつた。

「村から東京へ出て來て居るものは、相當澤山あるらしいが、どれもこれもろくでなしだ。お前だけは一つ勉强して村の名譽になるやうな人間になつて呉れ。」

たるんだ瞼の間に落ち込んだ眼にも强い光があつた。それで村一統を睥睨し、村一統を慴伏せしめた猛獸の眼だ。老いさらばえてゐても彌右衞門爺は矢張彌右衞門爺だつた。

「村にも久しく御無沙汰だが――村もかはつたらしいな。」

「はい。すつかり變りました。」

「寅次郎は丈夫か。」

「はい。丈夫です。」

寅次郎といふのは私の父の事である。

「此頃身上向はどうだ。」

「あまりよくないやうです。」

「寅次郎などは、多少學問もあり、奮發すればどうにかなる男だが、あれはどうも姑息な男でな。――いや、姑息といへば、村の奴等みんなさうだ。村に人物が無えと、村は滅びる。」

彌右衞門爺は、ぶる〳〵とふるへる手で、小袋からつまみあげたきざみ煙草を煙管につめな

から、

「私が計畫したあの電鐵だ。五六年前に出來たさうだが、私が發起した時にこしらへて置いて見ろ、村はそれで立派に生きかへつたのだ。私は十幾年も前にそれに眼をつけたのだ。」

彌右衞門爺が、身上をすつてしまつたのも、刑事の被告になつて村から追はれたのも、その電鐵計畫の失敗からだつた。その無念さが、まだ彌右衞門爺の涸れかけた血を湧き立たせるらしい。

今昔の感に甚え申さずとか、その後の事承り度くとか手紙には書いて來たので、老い疲れていくらかセンチメンタルになつた一人の老人を豫想して私は訪ねて來たのに、その豫想は完全に裏切られたと云つていゝ。老い疲れてはゐた。が、彌右衞門爺の咳に搦まれた皺嗄れた聲には、矢張叱咤の韻があり、咆哮の韻があつた。あの大竹藪を背景にした池の端の邸の聯想から、虎の彌右衞門といはれた此の老人の、背をまるめて語る姿には、矢張、嵎を負ふ猛虎のすがたがあつた。

「嘉助の伜も、今東京にゐるやうだが、お前會つたか？」

そんな話の末に、彌右衞門爺は斯う云つた。

「いゝえ、會つた事はありません。東京にゐるといふ事はきいてゐましたが——」

「一二度、私のところに訪ねて來た。」

「嘉市君が——嘉市君がたづねて來たのですか。」

「うん。安月給を取つてゐるとかで、洋服など着てな。」

嘉助は、部落でも最下級の小作百姓で、地主としての彌右衞門爺に、必死の叛逆を試みた男だ。その伜の嘉市が、父の怨家たる彌右衞門爺を訪ねて來たとは——？　私は何か腑に落ちなかつた。

「親父は大馬鹿者だつたが、伜の方はいくらか生れ增してゐると見える。」

彌右衞門爺は笑つた。嘲りを含んだ辛辣な笑ひ——それが昔のまゝのものであつた。

私は、その時になつて、彌右衞門爺には鄕里を出る前に貰つた後妻がある筈だつたと氣がついた。その後妻の腹に生れた一人の娘の小夜子——。その人たちはどうしたのだらう？

然う思ひながら、部屋を見廻した私は、私の坐つた斜めうしろの部屋の隅に、此の部屋の割合には大き過ぎる佛壇と、それに並んで、これも此の部屋にしては華やかすぎるもの——友禪メリンスの掩ひをかけた一箇の鏡臺があるのに氣がついた。

あの佛壇は、池の端の邸の奥の間で見た事のあるものだつた。幾代となくつゞいた舊家井上家の、その古い傳統を示すところの佛壇である。

鏡臺は、それは、生活の垢にしみついた他のいろ〳〵の調度類の中で、ただ一の新鮮な存在だつた。勿論、それは、爺さんの娘――若い後妻に生ませたあの娘のものに違ひ無かつた。併し、私もまだ若かつた。娘さんは――？　とも小夜子さんは――？ともきけずにゐると、

「うちの者、生憎今、風呂に行つてゐるのでな。もう、歸つて來る筈だ。」

彌右衛門爺は辨解するやうに斯う云つた。

すると、その言葉が合圖でもあつたやうに、かたことと下駄の音を立てて、二人の女性たちが歸つて來た。

「おや、まあ、東の坊ちやん。」

先づはひつて來て斯う聲をかけたのは、彌右衛門爺の後妻のお榮さんだ。彌右衛門爺より十七八も若い筈の。お榮さんだが、さすがにもうお婆さん臭くなつてゐた。

「本當にまあ、立派におなんなすつて――。」

と、ひどく情緒的な調子で云つて、

「よく訪ねて來て下さいましたよ。でも、まあこんなみじめなありさまで、まつたくもう、村の衆には顔があはされなくなつてしまひましたよ。」

しかし、それほど恥ぢてゐる風にも見えず、私の母の事などいろ〳〵ときくのである。

ばしやばしやと上下の唇を叩き合はせるやうにしながら、賑かに話し立てる此の人の昔の癖も些ともかはらなかつた。出戻りで、池の端に女中奉公にきてゐたのを、彌右衛門爺の氣に入られて後妻に直されたといふ此の女も、矢張喰ふや喰はずの水呑百姓の娘だつた。きれうはいゝが、性質のよくない女といふ風にその時分村では噂されてゐたものだが――などと考へながら、私はお榮さんの快辯に耳をかしてゐた。

「うちの旦那もね、どらんの通りすつかり老い耄れてしまひましてね。矢張此頃は兎角村の方がこひしくなつたと見えて、坊ちやんが東京においでなさるときくと、會ひ度い會ひ度いとしきりと申してをりましてね。」

「何を云ふのだ。」

と、彌右衛門爺は、そのお榮さんの話の腰を折つて、

「お小夜はどうした？　お小夜に出て來いと云へ。」

「はい、はい。」

お榮さんは振りかへつて、

「小夜子や。」

溶けるやうな聲で呼んだ。

「はい。唯今。」

張りのある豐かな聲がお勝手の方からきこえた。此の一聲だけで、此の煤びた電燈の光が、ぱつと明るくなつたやうな氣がした。

小夜子は、茶盆を捧げて出て來た。

「覺えてゐるかえ、小夜子。東の兄さん——邦夫さんだよ。」

お榮さんに云はれると、小夜子の顏は少し赤くなつたやうに思はれた。

「えゝ。」

とかすかにこたへて、此方を見上げた小夜子の顏を見た時、私は正直のところ、びつくりした。小夜子はすばらしい娘になつてゐた。

髪も無造作な束髪で、着物も古びたセルか何かであつたが、その髪は黑々とゆたかに、その

姿態はいかにもたをやかだつた。輪廓の正しい卵形の顏に、濃い眉と、すうと通つた貴族的な鼻梁とは、これは明らかに池の端の家族的特色で、切長の眼、すこし厚目の脣——その重厚な端正な美貌はたしかに親父譲りのものであつた。

さすがに池の端の一粒種だ。あの江戸幕府よりも古い歴史をもつてゐるとかいふ井上家の傳統は、この東京の片隅の裏長屋に、天晴一輪の名花を咲かせてゐた！　私はさう思つて、思はず小夜子の顏に瞳を吸ひ寄せられたのである。

「もう、これも十九になるので御座いますが、からきしねんねえでございまして。」

さういふお榮さんの顏に位得意の色があつたが、

「今年の春女學校を出てな。」

といふ彌右衛門爺の顏にも誇らしげな微笑があつた。——なるほど、これだけの娘をもつてゐればいくら自慢してもいいわけだ。私はさう思はざるを得無かつた。

舊い家

牛込の神樂坂の下宿に小夜子が私を訪ねて來たのはそれから五六日經つてからであつた。長い苦鬪の末に、四五篇の短篇によつて漸く文壇の片隅に足を踏みかける事が出來た私の荒涼たる下宿生活。もし、彌右衞門爺の、あのみじめな零落振りを見てゐなかつたなら、私は此の美しい訪問者の前に顏を赤くせずにはゐられなかつたであらう。

小夜子は、その母には似ず口の重い娘だつたが、

「おかきになつたものは、みんな拜見してゐますの。鄕里の事を書いていらつしやるので——。」

先づ然う云つて微笑して見せた。

「いや、つまらないもので——それにあれは小說ですから、事實をそのまゝ書いたんぢやありませんよ。」

彌右衞門爺をも、その後妻の子の母をも、私はよくは書いてゐない。で、辯解の意味を含めて、私は斯う云つた。

「でも、父は、仲々よくかけてゐると云つて居りましたよ。そして、あの道ちやんの事おかきになつた（最後の者）のを讀んだ時は、かあいさうな事をしたつて、涙をこぼして居りましたわ。」

「さうですか。それは——。」

「父も、此の五六年以來、すつかり氣が弱くなつて居ります。何しろ年齡でございますから。」

「しかし、あなたのお父樣はまだ仲々——。私など、あなたのお父樣の前へ出ると、自然に頭がさがてしまひます。」

「口では相變らず元氣な事を云つてゐますけど——。」

小夜子は靜かに微笑して見せて、

「私、是非一度あの生れた村へ歸つて見たいと思ひますの。村を出たのが、五つの時でしたから、村の樣子など、全然覺えてゐませんけど、でも、あなたのお書きになつたのを拜見してゐますと、夢のやうに薄れてゐる記憶が、それからそれへとはつきりと浮んで來て、村の景色がありゝと眼に見えてまゐります。」

「さうですか？　外の事は兎も角も、村の自然だけは、まあ、あの通りです。それから、あな

たのおうちの、昔の様子なども、人物を別にすれば、そつくりその儘に描いたつもりですよ。」

「家の裏に大きな竹藪があつた事だけは、私がかすかに覺えてゐるやうな氣がします。それからお庭の前に、大きな櫻の樹があつた事も――」

「えゝ、大きな欝金櫻でした。非常な老木で、花の盛りには部落中の何處からでも眺められました。何しろ、あなたのおうちは、高い丘の上にありましたからね。」

一樹にして林をなすやうな巨木で、その上淺黄色に咲く珍らしい櫻は、花の盛りには態々遠くから見に來る人さへあつた。

「もう、何にも殘つてはゐないさうでございますのね。邸あとはみんな麥畑になつて了つてゐるんださうでございますね。」

「えゝ、あの名物の櫻も、いつの間にか枯れてしまひました。樹にも矢張壽命といふものがあるんですね。」

私はかう云ひながら、その櫻にからまる一つの凶々しい事件を思ひ出してゐた。あれは、小夜子がまだ生れない前の事であつた。西が岡の小作百姓の一人が、その櫻の枝にぶらさがつて死んだのは――。

小作料の滯納から、畑をとりあげられたその百姓は、彌右衞門爺の無慈悲を怨んで、自棄酒の醉ひを驅つては、池の端の臺所口に怒鳴り込んだりした事も屢々あつたが、そのうちに池の端の納屋から怪し火が出たことから放火の嫌疑をかけられ、警察にあげられさうになつた時、彼はその櫻の樹で首をくゝつたのである。

それがけちのつきはじめで、池の端の沒落は此の出來事の頃から急にテンポを早めはじめたのだといふ事であつた。だが、それにしても――と思ひながら、私は小夜子に、

「あの嘉市君がお宅へうかゞふさうですね。」

然うきかずにはゐられなかつたのは、その首をくゝつた小作百姓が、嘉市の父の八木嘉助だつたからである。

「えゝ。」

と、小夜子はうなづいて、

「時々いらつしやいますわ。」

こだはりの無い調子で、

「昨夜もいらつしやいました。あなたの事をお話しますと、そのうち、一度うかゞはせていた

だくと云つてかへりました。」

「然うですか。嘉市君には僕もあひたいですよ。嘉市君、今どうしてゐるんですか。」

此間の晩、訊きそびれてゐたので、私は斯うきいた。嘉市は私より、四つ五つ年下であつたが、東京へ出たのは私より先であつた。

「私と同じところに働いてゐらつしやいますの。」

「あなたと同じところに？」

去年の春女學校を卒業した小夜子が、今、小石川の方のある會社に勤めてゐるといふ事は、此間、訪問の時にきいてゐた。

「えゝ、はじめのうちは、お互ひに、同じ村の生れの者だといふ事は知らずにゐたんで御座いますけど、八木さんのお言葉に、父や母のと同じ訛りが交つてゐるのをふときゝつけたものですから、何だかお懐かしいやうな氣がして――。」

それできいて見ると、同郷の人とわかつて、それから次第に親しくなつたのだと、小夜子は語つた。

「さうですか？　そりやあ奇遇でしたね。」

それにしても――と私は思つた。嘉市は、父の悲劇を知らないのであらうか。父と池の端との關係に就いて知らないでゐるのであらうか。その頃嘉市はまだ生れたばかりの嬰兒であつた。しかし、母の口からなり、又、周圍の者の口からなり、その事情をきいてゐない筈は無いのだと思ふが――。

「八木さんのおうちも、もうあとかたも無くなつてゐるんですつてねえ。」

「えゝ。矢張畑になつてしまひました。」

「あの方も十一の時とかに村を出たまゝ一度も歸つた事が無いんですつて。」

「さうですか？　――私も、此頃は、極く稀れにしか村へは歸らないんです。」

「八木さんも、あなたがお書きになつたものを讀んでいらつしやいますわ。」

嘉助の事件も書き度いと思つてゐたが、それぢや、あの事件だけは減多にかけないぞと私は思つた。

「（最後の者）といふのは、本當に宜うございましたわ。」

小夜子は、相變らずの靜かな微笑で續けた。

「しかし（最後のもの）といふ主題は事實と違つてゐましたね。斯うして、あなたにお目にか

ゝると、あれは取消しにしなけりやなりませんよ。」
と私は云つた。
「僕は、あの道也といふ子供を、池の端の最後の者だといふ風に書いたんですが、それは僕の思ひ違ひでしたよ。池の端には、あなたのやうな立派なあとつぎが出來てゐたんですからね。」
「まあ、立派なあとつぎなんて――」
小夜子は少しはにかんで見せた。
「本當ですよ。此間、あなたにお目にかゝつた時は、正直のところ、僕はびつくりしたよ。あなたが、そんな美しいお嬢さんになつてゐたなんて――。」
「あらあら、大へん！」
小夜子は稍々蓮葉らしく云つた。頰がぱつと赤くなつたやうに見えた。
「いや、本當ですよ。」
「厭ですわ。そんな風に仰有つちや。――でも、父は、私の爲めにはずゐ分苦勞したらしいんでございますの。私にとつては矢張いゝ父なんですわ。」
「さうですとも。」

「何しろ、あの調子ですから、お氣持を惡くなさりやしなかつたかと思ひますけど――。でも、今ぢやすつかり氣が弱くなつて、しきりに、村の事をおもひ出すらしいんですの。あなたがいらしつて下すつた事をどんなによろこんでゐるか知れません。時々見に來てやつて下さいませ。」
「えゝ。又、そのうちにおうかゞひするつもりですよ。」
小夜子は辭して歸らうとする時、膝の脇に置いた風呂敷包から一本の軸をとり出して、
「これ、何だか知りませんけど、父が邦夫さんに持つて行つてあげろと仰有つて――」
表裝もぼろ〳〵になつたその軸を開いて見ると、
（疎影横斜水清淺、暗香浮動月黃昏）
と清淡な草體、貫名海屋の二行ものであつた。
「あゝ、これはすばらしい。」
「こんなぼろ〳〵のものをつて云つたんですけど、田舍から持つて來たものゝ中でこれだけは、大事にとつて置いたものだから、邦夫さんへの土產にもつて行けと云ふものですから――」
私はよろこんで頂戴した。老人の好意が、しみ〴〵と嬉しかつた。

老人の好意も嬉しかつたが、小夜子が訪ねて來て呉れたその事が、私にとつては先づ何よりのよろこびであつた。

本當にいゝ娘になつてゐたものだ——。

あの彌右衞門爺の孫の道也といふ子供を、池の端の最後の者として、その道也の死によつて、池の端の歴史に終止符を打つた私の作品「最後の者」は、明らかに事實を僞つてゐた。

彌右衞門爺が私を呼び寄せたのも、あの作品に對する抗議を事實を以て示さうとしたのではなからうか？　いや、今日の小夜子の訪問も、小夜子自身の身を以ての抗議で無かつたとは云へないのだ。

「池の端にはまだ私といふものが遺されてゐるんですよ。」と口に出しては云はなかつたけれど——。

私は小夜子の辭し去つた後、あの池の端の沒落の歴史を、又、改めて回顧して見ずにはゐられ無かつた。

江戸幕府より古い家だと傳へられた井上家は、昔はその家の横手に大きな池があつたとかで、それ故に「池の端」といふ屋號で呼ばれてゐた。田地六十町歩、山林は百餘町歩の大地主で、池の端代々の大旦那は、村の人々から殿様扱ひにされてゐた。彌右衞門の祖父が、天保七年とやらの大饑饉に五戸前の庫を空にして窮民を救つた事は、今になほ美談として傳へられてゐるが、彌右衞門はさうした祖父には似無い暴君で、それもこれも、沒落を前にしてのあがきがさせた業であつたらうが、小作人に對しても酷薄な振舞が多かつた。小作の畑を用捨なく引きあげて、幾町歩といふ土地を一面の百合畑にしてしまつた事などもある。百合の根が横濱の市場から米國に輸出されるといふので、さうした大規模の栽培を試みたのであるが、それも二三年でやめて了つた。人一倍山氣も強かつたから、凡そその土地で企て得る限りのいろ〳〵の新事業に片端から手をつけたが、みんな結局は失敗で、さしもの大財産もが〳〵と崩れて行つた。あの見渡す限りに咲きみだれた百合の花が部落をさながらに眼も彩な花苑にしたことが、今にして思へば池の端の最後の榮華でもあつたらうか。縣會議員として活躍したり、代議士の候補に立ちかけたりして、井上彌右衞門の羽振の益々盛んなやうに見えたのも表面だけのこと、内實はもう借金で首がまはらなくなつてゐた。

「池の端も、もうおしまひだ。」

「私の父などは、さう云つて嘆息してゐた。」

その上、彌右衞門爺は、内行のおさまらぬ方で、その妻が死ぬと直ぐに、上女中に仕つてゐた出戻の女をあとに直した。それが、小夜子の母のお榮さんであつた。

「何ぼ何でも、池の端の大旦那と云はれるほどの人が、あんな女を——」

と、近所の女達も唇を反らした。お榮さんは、田舍にはめづらしく垢ぬけのした女だつたが、小作百姓の娘であつたし、それに、年齢もちがひ過ぎてゐた。その頃、彌右衞門爺の一人の息子の信之も、既に妻を迎へてゐたが、その信之の妻のお靜さんといふ人と、お榮さんは二つ三つしか違はなかつた。

勿論、お榮さんもよくは云はれ無かつた。

「あれはなか〳〵のしたゝか者だ。大旦那も大旦那だが、あの女も玉の輿にでも乘る氣で、自分の方から持ちかけたらしい。」

などと云ふものもあつた。

信之といふ人は、中學も途中でやめたほどの病身な人で、氣弱な物靜かな、居るか居無いか

わからぬやうな人だつた。その妻のお靜さんは、町の造酒家の娘で、美しいが、矢張弱々しい、信之に似合の女だつた。

「お榮さんが、姑面をしてお靜さんをいぢめるさうだよ。」

女たちは、そんな事を云つて、お靜さんに同情し、お榮さんをにくんだ。

お榮に女の子が——小夜子が生れると、そのあくる年に、お靜にも男の子が生れた。それが道也だ。

私が「最後の者」といふ小説に書いたのは、その道也の事である。

あらゆる事に失敗したあげ句、彌右衞門爺が、企てたのはH市と、N町との間に私設の鐵道を敷く事であつた。——それは、今から五六年前に竣工したが、それよりも、十年も前の當時にあつては、此の企はあまりに早きに過ぎた爲め、これも失敗に了つた。

そして、此の事業の爲めに、彌右衞門爺の犯した脱法行爲の責任が、何も知らぬ信之に負はされる事になり、信之は刑事上の被告として告發されるに至つた。

そのへんのいきさつについては、實は私もよく知らないのだが、兎に角、病弱な信之が幾箇月かを、未決檻で送り、やうやく放たれて歸つて來た時、私の家を訪ねて來て、

「私は親父の犠牲にされたんです。あんなひどい親父といふものはありません。いゝえ、あれは親父ぢや無い。かたきです。どんなに怨んでも怨み足りないかたきです。」

鬚ばう〳〵と痩せをどろへた幽鬼のやうな青白い顏を、悲憤の涙にぬらして、私の父に訴へたその姿は、今も私の眼に殘つてゐる。

村の人達の同情は皆信之にあつまつた。彌右衞門爺の上には非難の雨が浴びせかけられた。そのうちに、池の端は破産し、家邸までも他手に渡る事になつた。

彌右衞門爺は後妻のお榮と、その時五歲の娘の小夜子とを伴れて、村を去つた。

「なあに、私はまだへこたれはせんぞ。東京に出て立派に一旗あげて見せる。」

彌右衞門爺がかういつて東京へ出て行つたあと、信之は賣り殘された納屋を住居に直して細細としたくらしをつゞけてゐた。

みなしご

もと〳〵病身な信之は、相當長い間の囚禁生活で、すつかり健康を損ね、蠟燭の樣に痩せて

力無い咳をしてゐた。肺病だと何人の眼にも見てとられた。そんな身體で、信之は川向うの隣村の村役場で書記として通つてゐた。お靜の生家からいくらかの補助はくるらしかつたが、それ丈ではくらしが立たないといふ事であつた。

私もその頃小學校を卒業し、卒業すると直ぐに代用教員といふものになつて、川向うの、同じ村の小學校に通ひはじめてゐたので、往復の途でつれになる事がよくあつた。

往復でたつぷり二里、おまけに相當嶮しい路は、信之にはひどくこたへたに違ひない。信之は、苦しさうに喘ぎながらのろ〳〵と歩いてゐた。

「ぢや、君も、東京へ出て行くつもりなんだね。」

「え、、東京へ行つて勉强しようと思ふんだけど――。」

「身體さへよけりや何でも出來る。君は頭がいゝんだからね。」

歩きながら、信之はぽつり〳〵と話した。東京へ出て中學にはひり、卒業間際に病氣の爲めに歸つて來た信之は、東京に見果てぬ夢をのこしてゐるのであらう。東京の話をする時は、信之の眼にも一種の輝きが浮ぶやうに見えた。

歸省の時、紙の香の淸かな新刊書の二三冊を土產にもつて來てくれたり、休暇歸省中はヒル

テンを張つて小鳥狩をして一緒にあそんで呉れたり、私を弟のやうに愛して呉れた信之だつたから、私はさうして伴れ立つて歩くのを嬉しいと思つてゐたが、しかし、斯うしてのろ〳〵歩いてゐると又遲刻するだらうと思ふと、いらいらしずにはゐられ無かつた。

で、私はしまひにはなる可く同伴の機會を避けるやうにした。

その私の氣持に氣がついたのであらう。たまにつれになる事があると、

「構はず　先に行き給へ。僕はあ病人なんだ！」

怒つたやうな調子で、信之は云つた。

ある日、それは秋も末の事だつたが、職員會議でおそくなつて、夕暮の道を急いで歸ると、川縁の石に腰をおろし、穂薄の繁みに半ば身を埋めるやうにして、じつと眼をとぢてゐる信之の姿に逢着した。外に人通りの殆どない路の、ざあざあと鳴る川瀨の音の一段高くきこえるやうな黄昏時の、その雀色の中に浮び上つてゐる青白い顔を見ると私は思はずぞつとして、

「信さん。」

と呼びかけた言葉も半分は咽喉につかへてしまつた。

信之は、ものうげに顔をあげると、半眼をひらいてちらと私の顔を見た。ひどく外々しい、

といふよりも寧ろ鋭い敵意をこめたやうなその眼を見ると、私は物も云はずに逃げ出してしまつた。

せめて自村の役場へ勤めるやうにすれば通勤もらくになるしと、私の父などがその運動をしたのだが、彌右衛門爺に對する村一統の反感がそれを拒んだといふ事だつた。何にしても、往復二里の通勤は信之の身體には無理であつた。信之が、大喀血をして床についてしまつたのは、それから間も無くであつた。

見舞に行く人達に對しても信之は、唯、白い冷たい眼を酬いるだけだつた。そして、時々狂暴な發作を起して、看病に心を碎いてゐる妻のお靜に物をなげつけたりする、といふ事であつた。

「信さんよりも、お靜さんがかあいさうだ。世が世ならばねえ。」

女たちなどは、斯う云つてお靜に同情した。

箪笥幾棹、長持幾つといふやうな、すばらしい支度で嫁入つて來たお靜さん——部落で自慢の花嫁御寮のお靜さんの、貧のやつれ看病のやつれで、見るかげもなくなつたみすぼらしい姿は、とりわけ女たちの感傷をそゝるに充分であつた。信之の病床生活が一年以上にもなつた

頃は、

「あの人もまだ仲々業が盡き無えと見える。——あんな風にいつまでも續いたら、お靜さんの身體の方が保たなくなるだらう。」

などと云ひ出す者も出來て來た。

「ほんとだよ。——それにしても、彌右衞門旦那だつて、一度ぐれえ見に來ても宜ささうなものぢや無いか。」

「東京へ行つたきり、まるで音沙汰無しだといふ事だが——もつともね、今更顏出しも出來無いだらうさ。何でも、彌右衞門爺さん、生きては二度と此の村の土を踏ま無え！　出て行く時にさう云つてゐたさうだよ。」

「それにしたつて、親子の仲ぢや無いか。たつた一人の息子が死にかけてゐるといふのにさ。」

「それがさ。」

私の耳に奇怪な傳說（？）がはいつたのはその時分のことだつた。

彌右衞門爺が信之に對してそんなにも冷酷なのには、祕密にされてゐる一つの理由があるといふのだ。信之は、彌右衞門爺の本當の子ではないといふのだ。あの彌右衞門爺の前妻の過失

から生れた子だといふのだ。

あの柔和な情深い、彌右衞門爺とはうつてかはつて評判の宜かつた大おかみ樣——あの人にそんな大それた過失があつたのであらうか？　それは信じられない事だ。それは、彌右衞門爺の非人間的なやり方をヂヤスチフアイする爲めに無理につくりあげたデマに過ぎない——さう云つて一笑に附するものもあつたが、しかし、信之の顏立が彌右衞門爺とはあまりよく似てゐないといふ事は、何人の眼にもわかる事實だつた。

それは兎に角として、業人——業の深い人、と云はれた信之が、父を呪ひ世を呪ひながら、悶死といふに近い死に方をしたのは、二年近くもの長い病床生活の後であつた。

その信之の死を告げてやつた手紙は、附箋がついて戻つて來た。東京へ出た彌右衞門爺は、もう住所さへ不明になつてゐた。

「かあいさうなのはお靜だつた。一人子の道也と共に生家の方で、引きとらうといふのを、せめて一週忌までは、と、その夫無き家を守りつゞけてゐたが、その一週忌が來ないうちに、信之と同じ病氣の、しかも急性なやつで呆氣無く死んでしまつた。

「本當に信之さんといふ人も業人だ。とうとうお靜さんまでつれて行つてしまつた。」

部落の女たちは、お靜さんを悼むおもひをにくみに代へて墓の主の方へもつて行つた。

本當にお靜はあはれな女であつた。が、もつとあはれな者がそこに一人ゐた。それは、信之の子の道也だ。道也は、七つになつてゐたが、完全に孤兒となつてしまつたのである。

お靜の生家では、お靜の親達はもう死んでお靜の兄の代になつてゐたが、よるべない孤兒の道也は、こちらに引き取ると申出て來た。

組合中で寄合として、道也を、その伯父の許にやる事に一應相談はきまつたが、先方からお靜の弟が道也を伴れに來たその時になつて、

「坊ちやんをやる事は不承知だ。」

さう云ひ出したのは、籔下の六之助爺だつた。六之助爺は親代々池の端の小作をしてゐた水呑百姓だが、道也は六之助の妻のお米になつついてゐたので、お靜の死後、道也は、六之助爺の家に、當座の處置として引きとられてゐたのであつた。

お米は道也をかあいがつてゐた。だから、六之助爺が、

「私がとても食ふや食はずだが、坊ちやん一人ぐらゐ何かして育てゝあげるで——坊ちやんは當分私にあづけて置いて貰へ無えかね。」

さう云ひ出したのは、お米のさしがねに違ひないと思はれた。

「だが、あの寄合の時には、お前も贊成してくれたんで、先方にもさう返事をしてやつたんだからな。今更、變改も出來無からうが——。」

と、私の父は當惑の色を見せて云つた。すると六之助爺は、

「私も、あの時はその氣になりましたがね、わしは、あの滋野の旦那つていふ人の顏附が氣に喰は無え。厄介者だが仕方が無えから引きとつてやる——さういふ顏附があり〳〵と見えてるでな。あんな風だと坊ちやんがかあいさうだ。」

ひどくいきり立つて云つた。

「うむ。そりやかあいさうだとは思ふがな。」

道也の處置については、私の父もかなり心を苦めて居た事を私は知つてゐる。私が道也を自分の家に引取る事を父に云ひ出して見た時、それは、おれも考へてゐるのだ。だが、何しろうちもこんな狀態なのでな、と云つて父は溜息をついてゐた。私の家も急激な沒落の過程にあつたし、それに、私の弟や妹も道也と同じ年頃で、その上母は病氣勝ちだつた。

「それだけで云ふんぢや無え。私は、坊ちやんがかあえさうだ——たゞ、それだけで云ふんぢ

や無えだで。」

と、六之助爺さんは、一膝押しすゝめるやうにして云つた。

「彌右衞門旦那がどうだらうと、池の端と云へば、近在で何人知ら無えもののねえ家柄だ。彌右衞門旦那には恨みこそあれ、何の義理も無えが、池の端の先祖代々にや隨分村の爲めになつた人もあるでがす。坊ちやんはその池の端の一粒種だ。部落でその世話が出來無えでたとひ親類とはいへ、他村へやつて厄介者あつかひにされちや、部落の名折になりやしめえかと私は考へるだ。」

「うむ。うむ。」

と父はうなづいた。

「部落の氏子惣代の池の端の一粒種だ。それを他村にやるつて法は無え。私あ、その日ぐらしの貧乏人だが、あの坊ちやん一人位の面倒は引き受けるで。」

「さうか。お前さんがその氣になつてくれりや何よりだ。私だつてその事あ考えねえわけぢや無かつたんだ。なに、六さんにだけ押しつけちや措か無え。組合中であの子の世話をする事にしよう。」

父は同意した。八軒の組合ぢうの者も皆同意した。

そこで、滋野（お靜の生家）へやる事は、改めてことはつて、道也は、組合中の共同の義務の下で、六之助爺さんの家に養はれる事になつた。

道也は母親似の色の白い眼の大きい、上品な顏立の子であつたが、頸の細さや、濃い長い睫毛やに、痺弱な體質を思はせた。六之助の嫁のお米は我が子同樣にかあいがり、部落の女たちも、あの池の端の思ひ出を、孤兒のあはれさに添えていとしがつた。

病氣のせゐか人一倍感傷的な私の母などは、外の子供達同樣垢だらけになつて、飛び廻つてゐる道也を抱き寄せて、

「道坊や、お前はまあ——。」

さう云つて涙ぐんだ。

が、當の道也は、さうした自分の身の上を理解するにはまだ餘りに幼なかつたし、それに、そんな暗い環境に育ちながら、些ともいぢけたところも無く、むしろ並はづれの腕白だつた。

仲間の子供たちから「坊ちやん」、「坊ちやん」と立てられるのをいゝ事にして、餓鬼大將になつてあばれまはつてゐた。

「いや、なか〳〵豪傑だわい。矢張な、池の端の血は爭はれ無え。」
と、私の父は苦笑して、
「うん、矢張、彌右衞門爺さんの孫にちげえ無い。」
あの妙な傳說を不定するやうな口吻でつぶやいてゐた。
村の街道を馬力車が通つた。學校の歸りなどに、うしろからこつそりとその馬力車に飛び乘つては、馬力曳にみつけられて怒られる、怒られるのを面白いことにして、私なども子供の時分にはよくやつたものだが、ある日の事だつた。道也が、それをやつて、馬力曳につかまへられた。馬力曳はむしのゐどころがわるかつたものと見え、道也の首ねつこをおさへつけて、拳固で二つ三つ小突いてゐた。ところへ、畑の中からとび出して、
「何をする?」
と、怒鳴つたのは、六之助爺さんだつた。
「何をするだ。ちいせえ子供をつかまへて——。」
六之助爺さんは、おそろしい勢で馬力曳にくつてかゝつた。
「何をするつたつて、此の餓鬼、いく度叱つても車の尻にとつつきやがつて——そんな圖々し

い餓鬼は無えんだ。」
馬力曳は、六之助爺さんの眼の前でもう一つ道也の頭を小突いた。
「こいつ!」
六之助爺さんは、いきなり馬力曳につかみかゝつたので、あはや大喧嘩にならうとした時、通りあはせて私の父が、六之助爺さんを抑へたが、六之助爺さんはぽろぽろと涙をながしながら、
「外の子とは違ふ。坊ちやんに手をかけやがつて——。」
ぶる〳〵とふるへながら喚いた。六之助爺さんの、あまりに烈しい怒りに、いさゝか呆氣にとられ氣味だつた馬力曳は、
「坊ちやん? 坊ちやんたあ何の事だ。」
けげんさうに問ひ返した。
「池の端の坊ちやんなんだ。外の子供とは違ふぞ。」
「池の端?」
「池の端を知ら無えか。」

六之助爺さんは傲然とした調子で云つたが、馬力曳は、

「知らねえな。」

と嘯いて、

「とんだ氣狂え爺さんだ。」

捨ぜりふをして去つて行つた。

「池の端を知ら無えなんて——。あの風來坊め！」

六之助さんは口惜しがつて地團太を踏んだ。——そんな事もあつた。

よくない評判をのこして沒落してしまつた池の端だ。それに、もうあの信之のわびずまゐだつた家もとりはらはれて、廣い邸あとは桑畑になつてゐる。池の端はもう歴史のあなたに消えて了つたが、しかし、その最後の者としてのこされた道也は、かうして部落のペツトとして成長して行つた。六之助爺さんは、時々、道也を、その邸あとにつれて行つて、

「坊ちやん、坊ちやんが大きくなつたら、こゝへもう一度でつかい家を押つ建てるんだ。な、池の端と云へば、此の十里四方で、何人知ら無え者のねえ舊家だつたで。」

そんな事を、くど〳〵とかきくどいてゐるところを、私も一度見た事がある。

最後の者

その道也が、ふとした風邪が、急性の肺炎になつて、ころりと死んで了つたのは、六之助爺さんに引きとられて、一年とは經たぬその翌年の秋の終りの頃だつた。——あれよ、あれよと云ふ間も無く死の神の手にひきさらはれて了つたのだ。

「こりやどうした事だ。坊ちやん、お前一體どうしたのだよ。」

六之助爺さんは、その屍骸の前に坐つたまゝ、一時間以上も、たゞぼんやりと手を組んでゐたが、斯う涙聲で叫ぶと、いきなり起ちあがつて、

「此奴、どうして坊ちやんを殺したのだ。」

然う云ひながら滅茶々々に老妻のお米を毆りはじめた。じや〳〵馬のお米も、此の時ばかりは、おとなしく、六之助爺さんの拳の下に頭を垂れて、

「おぢいさん、勘忍して下せえよ。つい、油斷したんだよ。まさか、私だつて、まさかこんな事にはなるめえと——」

泣いてあやまつたといふ事だつた。

變をきいて、おどろいてかけつけて行つた村の人達の前に老夫婦は肩を並べて手をついて、

「申譯ありましねえ。大事の坊ちやんを殺してしめえました。どうぞ、かんべんして下せえまし。」

疊に涙を落して詫びた。

老夫婦がいかに厚く道也にかしづいてゐたかは何人でも知つてゐた。親身の孫よりもずつと大事にしてゐた證據には、道也より二つ年上の孫の新平が何かの事で道也を泣かした時孫に眼のない六之助爺さんが、新平をぶんなぐつて、大きな瘤を新平のあたまにこしらへた事があるのでも知れる。

「何の。——これもみんな運だで。お前さん方の落度ぢや無えで。」

みんなさう云つて老夫婦を慰めた。老夫婦を慰める事が一骨だつた。

しらせてやらうにも彌右衞門爺の住所は不相變はつきりとしなかつたし、しらせを受取つたところで驅けつけて來るやうな彌右衞門爺さんでは無かつた。母の里から、くやみに來たのも叔父なる人では無く、義理一遍の使者だけだつた。しかし、道也がいかに深いかなしみと、い

かにふんだんの涙とでその死を弔はれた事であらう。

私はその葬式の日の事を細かに覺えてゐる。

カアン、カアンと少しづゝ間を置いて鳴らす澄んだ鉦の音が、晩秋の午後の靜けさの中に響いた。淡い黄いろい日を受けて、葬式の行列はのろ〳〵と動いて行つた。種々の文字を書いた黄色や藍や白やの紙の幟を先にたてゝ、金銀の蓮華の造り花を四隅にさした小さい棺が昇がれて行くあとから、部落の老幼男女が、首を垂れて一歩一歩と刻むやうに歩いて行つた。門口に立ち出でそれを待つてゐたお上さんたちはおばあさん達がそこから、襷をはづして行列に加はつて行くのだ。墓地の近くになる頃に、殆ど部落ぢう總出の長い長い行列になつてゐた。

「南—無—阿—彌—陀ン—佛南—無—阿—彌—陀ン—佛。」

主として婆さん達の群からゆつくりと節附けられた合唱がくりかへされる。一人が音頭をとると、あとの聲が追ひ縋るやうにそれに續くのだが、疲れ弛んだ聲帶からかすれて出るその聲々は、次第に弱々しくなり、地底にうめくものゝやうに沈んで行つて、またふら〳〵と空に向つてさまよひ出したやうに高く揚る——。

丁度日曜だつたので、私もその行列に加はつたが、棺のうしろにぴつたりと添つてあるいて

行く六之助爺さんは、しきりにすゝりあげては、一帳羅の紋服の袖を、涙と涕汁とで臺無しにしてゐた。人中へ出ると妙にはしやいで、ふざけた事を云つてみなを笑はせるユウモリストの吉造も、ひどく神妙な顔をして足元をみつめながらあるいて居る。場所柄を憚るやうな柄でもないのだが――。

「ほんとにねえ。」

と、さゝやいたのは私の家の東隣のお上さんのお德だつた。

「これで、池の端もとう〳〵おしまひになりましたよ。」

「二百年も三百年もつゞいた舊い家だといふ事だがねえ。」

私の母が答へた。

江戸幕府より古い歴史を持つといはれる池の端の最後の者もついにかうして墓に入るのかと私も感慨の胸にあつまるのを禁じ得無かつた。

少年道也の終焉は、舊家池の端の終焉だつた。この葬列は一人の少年のためばかりの葬列では無かつた。舊家池の端、部落の誇りである舊家池の端の葬式だつた。

行列は慈眼寺の丘を登つて行つた。慈眼寺の庭で葬式が行はれた。葬式が濟むと、棺は墓地に昇がれて行つた。墓地は寺の背後の山路傳ひに一町ばかりのところにある。

林の蔭に四五坪位宛にしきられた小さな墓地が澤山並んでゐたが、その一端の一段小高い地位に、丁度この墓地の全體を率ゐるやうにして池の端の墓地があつた。杉の樹立に三方を圍ませ、石の玉垣を前面にめぐらした此邊には一寸珍らしい立派な墓地で、二三十基ばかりの石碑が、白い苔の斑をまとひながらつらなりならんでゐた。

その石碑の中で一番新しいのが彌右衞門爺さんの先妻のであつた。その傍の、信之とその妻――道也の兩親の墓には、卒塔婆だけが立つてゐた。そして、その隣に、道也の棺は埋められた。

「お父さんとお母さんの傍だ。こんなら坊ちやんも淋しくは無からう。」

棺が埋められて了つた時、去りやらずに立つてゐたお上さん達は、新しい土の、しめツぽい匂ひの中で囁き合つた。

「お父さんやおかあさんが呼んだんだよ。」

「然うかも知れ無いねえ。」

「そんな世の中にいつまでも居る事あ無ねえ。早く此方へおいでッてねえ。」

女たちが感傷の涙を流してゐる時、私の父は、そこにずらりと並んでゐる池の端先祖代々の石碑を物色してゐたが、

「この人だ。」

と、中の一つを私に指して見せて、

「天保八年の饑饉の時に、藏を開いて施米をしたといふのはこの三代前の彌右衞門だ。」

「矢張彌右衞門といつたんですね。」

「代々彌右衞門さ。四代前の彌右衞門も、村の爲めにやずゐ分盡した人ださうだ。何と云つても池の端といやあ、十里二十里の先にもきこえた家柄だつたからなあ。——それもこれでおしまひだ。氣の毒に、此の御先祖達も、とう〳〵祀られぬ鬼といふのになつてしまつたのだな。」

若い私でさへ、溜息が吐かれたのだから、父の感慨は思ひやられた。

歸りの道にも、父は、池の端の歴史を說きつゞけたが、その時、東京に居る筈の、あの彌右衞門爺の事には一語も及ばなかつたのを見ると、父のあたまにも、もう彌右衞門爺の存在は無かつたのであらうか。名譽ある井上家の歴史と傳統とを振捨て、座土の神に背を向けて東京に飛び出し、漠々たる市塵のうちに行衞をくらまして了つた彌右衞門爺——あの異端者の彌右衞門爺の事など思ひ出すさへ腹立たしいといふ氣持から、父は強いて忘却のあなたにそれを押しこめて居たのであらうか。

それはともかくもとして、此時當然、思ひ出され語り出される筈の彌右衞門爺の噂が一語も何人の口にも上らなかつたのは事實である。

私も正直のところ、その時全然、彌右衞門爺の事は忘れてゐた。

そしてその時の氣持で、私が書いたのが、あの「最後の者」の一篇だつた。「最後の者」は道也の死とその前後周圍を書いたものであつた。

しかし彌右衞門爺は生きてゐた。美しい小夜子の父として生きてゐた。

小夜子は、今、命の盛りの美しさを以て、池の端の存在を、井上家の存在を、强力く私の前に主張してゐた。

私は、道也の死を描いて、それに「最後の者」の題を與へた事を悔いたが、これは快き悔いであつた。

彌右衞門爺が東京へ飛び出した直後いろ〳〵の噂が村にも傳はつて來た。

彌右衞門爺が、おでんやをしてゐるといふ噂などもあつた。隣村の何某が東京へ遊びに行つ

て浅草邊をぶらついてのかへり、夜更の街の屋臺店の暖簾をくゞると、そこの亭主が、何と、まぎれもなく彌右衞門爺であつた。彌右衞門爺もさすがに身を耻ぢたか、澁團扇で顏をかくしてゐた。あまり氣の毒なので、言葉はかけずに來たがと、その本人が云ひ觸らしてゐる、といふ事だつた。

池の端の主人ともあらうが、おでんやにまでなりさがるとは？ ——それをきくと、部落の人達は、その零落を傷まうとはしないで、その無耻を憎んだ。耻さらし、それは彌右衞門爺自身の耻ではなく、先祖以來の井上家全體の耻だつた。いや、部落全體の耻だつた。彌右衞門爺は部落ぜんたいに耻をかゝせる。みんな、さういふ氣持だつた。

おでんやをしてゐたといふのが事實かどうかは知らない。しかし、六十ちかくなつて東京へ出た彌右衞門爺の晩年が、惡戰苦闘の連續であつた事は想像に餘りがある。が、その惡戰苦闘も、あの一輪の名花を開かせた事で立派にむくひられたといふものでは無いか？

私は、彌右衞門爺さんが、小夜子を私に紹介した時の、あの誇らしげな顏附を思ひ出した。

さうだ。たしかに誇つていゝのだ。

さすがは彌右衞門爺さんだ——と私は思つた。

正直のところ、私はすつかり小夜子に傾倒して了つた。小夜子の訪問を得てから、少なくとも二三日のうちは、私は、小夜子の事ばかり考へてゐた。

これを云ふのは少しはづかしい、何しろ私はもう三十になつてゐたのだから。だが、まあ許して貰はう。私のその頃の生活といふものは、あまりに女氣といふものに遠過ぎてゐたのだ。それにもう少し辯解させて貰へば——いや、それは辯解にはならないかも知れない。が、私はどうも東京といふ都會に馴染めない性質で、捨てゝ來た田園に、常に一種の鄕愁を感じてゐた。だから、小夜子が、あの池の端の娘であるといふ事が、ふるさとびとであるといふ事が、餘計に私の心を惹いたのである。だから、私が、小夜子に愛を感じはじめたとしても、それは、半ばは、私の鄕土的感情がさうさせたのであると、私は敢て云はせて貰ひ度いのだ。

そして、それは小夜子の場合にも云へる事だと私は思ふ。小夜子は、初對面からして既に私に深い親愛の情を示した。小夜子はそれから一週間ばかりたつと、又、私を訪ねて來て呉れてひどく私をよろこばせて呉れたものだが、

「こんなに度々お訪ねしちやいけないでせうか知ら？」

さう云つて、見上げたそのつゝましやかな眼のうちにも、物なつかしげな思ひが露はに動い

てゐた。そして、

「母は、あなたの事をお隣の兄さん、お隣の兄さんと云つてゐますの。もし、私が田舎にくらしてゐましたら、本當にあなたは私のお隣の兄さんなんですわね。」

などと云つたが、小夜子も、幼なくして別れた鄕里に、深い思慕を寄せてゐて、その思慕が私への親愛となつたのである。これは小夜子の名譽の爲めに云ふが、小夜子は異性と云へば直ぐに戀を想ふやうな、さうした型の女では決して無かつた。だから、小夜子が私に對して、戀愛的な感情を急速に育てたとしても、それは、鄕土的感情といふ跳枝が有效にそこに働いてゐたからである。

いや、小夜子が私に對して戀愛的な感情を育くんでゐたかどうか、それは私には云へぬ事だ小夜子についてはそれは云へぬ事だが、私は——白狀する！　私は、たちまちにして小夜子を愛しはじめてしまつたのである。

私は小夜子を愛しはじめると共に、あの嘉市といふものゝ存在がひどく氣になりはじめた。自分より先に、小夜子の前にあらはれて、小夜子にふるさとの匂ひをもたらす事によつて小夜子の心を動かした嘉市なのだ。そして、同じ會社に籍を置くといふ關係上、小夜子と接觸する機會をも、自分より多く惠まれてゐる筈の嘉市なのだ。私はその嘉市の存在が何か忌々しいものに思はれた。私は早くも嫉妬めいた感情の餌食になりはじめたのである。

「嘉市君はどういふ人になつてゐます？」

二度目に小夜子が訪ねて來てくれた時、私は斯うきいて見ずにはゐられなかつた。

「どういふ人つて——いゝ方ですわ。」

「いくつになるでせうね。」

「さあ、私より四つ五つ上ぢや無いでせうか。」

「職工をしてゐるんですか。」

「えゝ、職工ですわ。」

私にもう少し自制力が不足してゐたなら、そんな職工などとつきあつちやいけませんとでも云つたかも知れない。しかし、職工と、駈け出し小説家とどつちがえらいか。小夜子自身職場の女だ。そんな事を云つたら却て輕蔑される事になる——と、私は考へざるを得無かつた。

同じ意味で、嘉市はあなたの家の小作人の伜ですよ、と云つて見せたところで、何のきゝめもあるまい。勞働服をまとうてゐる池の端の「令孃」は、さうした意味の封建的な階級的意識

は既に清算しきつてゐるのだ。

もし、私が人間としての誇りを根こそぎすてゝ了つたなら私は、嘉市の父が嘉助がどうして死んだかの顚末を――おそらく、小夜子はまるで知らずにゐるであらうその事實を、佛說めいた因果觀に添へて、語り出したであらうが、さすがに、それほど卑怯な氣持にはなれなかつた。

「あなたの事を、嘉市さんにお話しましたら、とてもなつかしがつていらしつたから、きつとそのうちに、おたづねすると思ひますわ。こゝにいらつしやる事をお話しておきましたから。」

私の氣持の動きを知らぬ小夜子は、かういつてゐたが、その嘉市が私をたづねて來たのは、それから――その小夜子の二度目の訪問から二三日たつてからの土曜日の午後の事であつた。

女王

八木さんといふ方ですと女中にとり次がれた時、私は「あ、來たな。」と思つた。私は、嘉市の訪問を、心の底に待ちかまへてゐたのである。逞しい身體に詰襟を着た嘉市は、のそりと私の部屋へはいつて來た。

「東の邦男さんですか。僕は藪の下の嘉市です。」

嘉市はそんな風に挨拶した。「東」といふのは、私の家の、「藪の下」といふのは嘉市の家の部落での呼名であつた。

「やあ。久振りだね。」

「丁度十三年と半年目です。」

嘉市は、數へて來たやうにさう云つて見せて、

「池の端の小夜子さんにお噂をきいて居ました。疾くにお訪ねしようと思つたんですが――」

懷かしげに微笑を浮べて、はき〳〵とした調子で嘉市は云つた。これがあのトラホオムで始終眼を赤くした、泣蟲小僧の嘉市であらうか。私は、

「大きくなつたねえ。君。」

思はずさう云つて了つた。

「大きくなつた？　は、は！」

と嘉市は笑つて、

「乞食の子も三年たてば、といひますよ。」

十一の時、父を失ふと共に郷里を出て、王子の職工にかたづいてゐる姉のところに引きとられたが、間もなく、姉にも死なれてから、まだ、尋常小學をも了へぬ身を東京の眞中に拋り出され、さん〳〵苦勞をしぬいたらしい事は、話してゐるうちに段々判つて來た。

「僕のやうなものは、どうあがいたつて所詮社會の下積ですよ。英語を敎へる神田の夜學校へ二年ばかり居眠りに行つた事もありましたがね。」

さう云つて自ら嘲つてゐたが、重ねた苦勞が人間の厚味になり、そのしつかりした樣子には、私も稍々もすれば壓され氣味になつた。職工でこそあれ、長と名のつく位置について、月給なども相當貰つてゐるらしい事も話の間に自然わかつて來た。

「しかし、矢張田舍はいゝですねえ。僕はこの前徵兵檢査で一度田舍へ行つて見ましたよ。——もちろん、役場へ一寸顏を出しただけで、部落へ行つて見ませんでした。行つたところで、家があるわけぢや無し、それに、隣近所の人たちだつてもう僕の事など忘れて了つてゐるでせうからね。でも、あの城山を久振で眺めた時は、正直のところ、眼がしらが少し熱くなりましたよ。」

「あゝ、田舍はいゝ。僕なんか、殊に東京つて土地になじめない人間でね。」

「しかし、あんたなんか、此の東京でぐん〳〵と伸びて行く人でせう。池の端のぢいさんも云つてゐました。邦男さんは出世するだらうつてね。」

「そんなこと判るもんか。——さう云へば、あすこへちよい〳〵行くさうだね。」

「小夜子さんを社で偶然知りあつたもんですから。」

嘉市は稍々鼻じろんでかう小さい聲で云つたが、

「邦男さん。」

と、見上げて、

「僕は、親父の事を忘れちやゐないのですよ。」

突然、云ひ出されたので、私はすくなからず狼狽した。

「不倶戴天といふ言葉がありますね。僕はあの爺さんをさう思つてゐるんです。——おやぢが、あの池の端の櫻の木にぶらさがつて死んでゐた姿は、眼をつむりさへすればいつでも浮んで來るんです。」

「さうか、君はあの事件を覺えてゐるのかね。」

正直にいふが、私はいくらかの皮肉を意識してさう云つたのだ。

「覺えてゐるかつて、僕は、あの時もう十一になつてゐました。彌右衞門爺さんはおやぢのかたきだ！　此の敵打は屹度するぞ。かういふと大袈裟になりますが、僕はその時、さう天地に誓つたんです。子供心にだつて、おやぢの口惜しさは、わかり過ぎるほど判つてゐたんですからね。」

「うむ。彌右衞門爺さんのやり方は全く酷かつたらしいね。君のお父さんばかりぢや無い。あの爺さんに泣かされた者は、他にも澤山あるそうだ。」

「他の人の事あ知りません。併し、僕のおやぢなど、少し足りない位の好人物でせう。それがあゝいふ死方をしたのはよく〳〵の事だと思ひます。」

「うむ。だが――。」

と、私は、又やゝ皮肉を籠めた調子で、

「彌右衞門爺さんは彌右衞門爺さん、小夜子さんは小夜子さんさ。」

「小夜子さんは、何にも知らないらしいんです。」

と、嘉市は心持顏を赤めて、

「僕が、爺さんに對して、どんな心持でゐるかも、だから、まるきり知らないらしいんです。」

「知らぬが佛か。」

「だのに、僕が彌右衞門さんを訪ねたりして、あんたはおかしいと思ふんでせう。」

「いや、別におかしいとは思はないさ。何しろ昔の事だ。」

「昔の事だからつて忘られるものぢやありません。――しかし、あの爺さん、もうすつかり老い込んぢやつて、あのよぼ〳〵の姿を見ると、復讐しようとする氣持なんか、無くなつて了ふんです。」

「復讐？　君はそんな事を考へてゐたのか。」

「池の端の彌右衞門爺さんは僕にとつて親のかたきですからね。」

「然う云ふ考へ方は、僕は贊成が出來ないな。」

「彌右衞門爺さん一人が惡いのぢやない。個人としての彌右衞門爺さんを憎んだつて仕方が無い。僕も、今ぢやさう思ふやうになつてゐます。」

「うむ。」

嘉市の言葉は、社會組織の不合理といふやうな點に落ちて行つた。全國一體の國民精神によつてがつしりと相結ばれてゐる現在から見ると、まことに隔世の感があるが大正十年のその頃

は、階級戰といふやうな言葉が、若き時代を動かしはじめてゐた。嘉市も、そのやうな方向に思想を進めつゝあるらしく見えた。

私も、木下尙江の「火の柱」「良人の自由」などを泣いて讀んだ事がある。此の二つの小說のどこかにあつたか、今はつきり覺えてゐないが、與五郎といふ貧農が、さしおさへられた新米の俵の封印を切つて、病める父の爲めに粥を煮る時など、幾度讀んでもその度毎に涙が頁を打つたものだ。眼のあたりに見た嘉市の父の憤死は、私にとつても大きなショツクであつた。野に巷に當時騷然として起つたプロレタリアからの叫びをも、だから、決して外には聞き流さなかつた。が私は、はつきり云へる。私の性來の何者かが、さういふ階級思想を私に反撥させた。私は、その當時も今と同じ民族主義者であつた。その當時は、たゞ、今ほど明確にそれを自覺しなかつただけの事である。

嘉市の言葉には、單なる聞きかぢりとは云へないやうなものがあつた。そんな本の幾冊かは讀んでゐたのであらう。理論的にも一應すぢみちは立つてゐた。

しかし、私は、嘉市の思想と嘉市の感情との間には、何かぴたりとしないもののある事が看てとらずにはゐられなかつた。

嘉市の思想は相當尖鋭なものらしいのに、嘉市の感情がそれについて行けないのだ。

私はそこに小夜子を見た。嘉市の思想と嘉市の感情との間に、小夜子といふ者が立つてゐる——。私はそれを感じた。

「さういへば、小夜子さんは——」

なぜ、さう小夜子にこだはるのだと、私は自分で自分を叱りつけながら、又、話題を小夜子にうつして、

「いゝ娘になつたねえ。」

「えゝ。」

「あんないゝ娘にならうとは思はなかつたよ。彌右衞門爺さん、ずゐ分自慢らしいね。」

「あの爺さんの事ですからね、娘を踏舞にして、もう一度世の中に出ようとしてゐるのかも知れませんよ。」

嘉市は吐き出すやうに云つた。

「そんな風が見えるのかね。」

「何とかいふ株屋が後妻に欲しいと云つて來て居るとかで——そこへ嫁けば、百萬長者の奥さ

んになれるんださうですよ。」

「爺さんやるつもりでゐるのかね。」

私の聲はいくらかわるくいつてゐたに違ひ無い。私は、かあつと身の内が熱くなつたやうな氣がした。

「嫁け、嫁けと云はれてあの人、一時は困つたらしいんです。あの母親が又母親ですからね。事務員とはいへ、小夜子さんが工場通ひしてゐるのを、まるでひどい墮落でもしたやうに思つてゐるといふ事です。」

「ふうむ。」

と、私は呻いた。

「爺さんの方は、流石にさうでもないけど、あの母親と來たら、娘を藝者にも賣り兼ねない女ですからね。工場通ひは墮落だが、藝者になれば出世だと考へる、さういふ、女なんです。」

「さうかなあ。さうは見えないがなあ。」

「しかし、小夜子さんて人はしつかりしてゐますよ。愉快な事は、爺さんでも母親でも、小夜子さんには結局頭があがらないらしんです。後妻の問題の時も、隨分しつこくすゝめられたらしいんですが、小夜子さんが手嚴しくつつぱねたので、それからはもうぐうとも云はないつて事です。――あのうちぢや小夜子さんは、まあ、女王見たやうなんです。」

「女王か。は、は！　立派な女王だ。」

私も、ぱつと心が明るくなり、思はず叫び聲を立てた。

それから十日ばかりたつと、又、小夜子はたづねて來た。

小夜子は、小さな花束をたづさへて來た。少女らしい情緒を、その濃い色ににほした花束がどんなに私をよろこばしたかは云ふまでもない。

「此間、嘉市君が來ましたよ。」

「さうですつてね。八木さんからうかがひましたわ。」

「なかなかしつかりした男になつてゐるぢやありませんか。」

「えゝ、しつかりした方だと思ひますわ。でも、時々、何だか子供つぽい事を仰有るわ。」

「は、は！　然うですか。嘉市君、すつかりあなたを崇拜してゐるやうですよ。」

「崇拜？　まあ、いやですわ。」

「女王。さうあなたの事を云つてゐましたよ。」

「女王。まあ、馬鹿らしいことを――。」

染まり易い小夜子の頰は、すぐに赤くなる。小夜子は、赤くなつた頰を伏せて、くツ、くツとおかしさうに笑つたが、

「みじめな女王様ね。うら店の女王様――。」

「池の端は、村で誇りにしてゐた名門ですよ。あなたは、池の端の娘です。あなたのお父さんやお母さんの子であるばかりぢやない、池の端の歴史があなたを生んだのですからね、誇りをもつてゐなきやいけませんよ。」

「池の端つて、そんな家だつたんでせうか。父からもよくきかされてはゐますけど。」

「立派な家なんですよ。村の總本家とも云ふ位の家だつたんす。――ずつと、昔の事でせうが、僕の家も、池の端から分れたのださうです。」

「えゝ、父からもそれはきゝましたわ。あんたの、ところとは、前には親類だつたんだつて。」

「さうですよ。だから、苗字は違ふけど、家の紋は同じでせう。」

「矢張、鷹の羽？」

「さうなんですよ。」

私は一寸調子づいて、

「だからね、株屋のおよめさんなどになつちやいけません。」

「あら！」

と、又小夜子は眞赤になつて、

「八木さんからおきゝになつたんでせう、その話――。いやな八木さん。」

「しかし、あなたがことはつたと聞いて、僕あ實に嬉しいと思ひました。」

「だつて――そんな事あたり前の事ですわ。」

と、小夜子は嚴肅な顏附になつて、

「あの時は、私、父や母があまりうるさく云つたら家を出てしまはうかと思ひましたの。でも、父も母も、いけなかつたとわかつたのでせう。おれが間違つてゐた。――あの强情な父が、さう云つて――それからはもう何も云はなくなりました。却て氣の毒なくらゐ！」

「氣の毒な事は無い。それでいゝんです。」

「いゝのね、それで。」

「いゝんですとも。」

「私ね、これから、あんたに種々相談相手になつて頂き度いの。母は何にもわからない人でなし、父も、もうあんな風にたよりにはなりませんし――。」

「えゝ――それは？」

「私が、八木さんとおつきあひする事は、母はあまりよろこんではゐません。でも、母もあんたは信用して――信用してなんて云ふのはへんですけど、あんたの事は、お隣の兄さんお隣の兄さんつて云つてますの。」

「お隣の兄さん。田舎にゐたらさうに違ひないですがね。」

斯う云つて微笑して見せた時、私の胸のよろこびの大波が打つてゐた、と特にとくに書く必要も無からう。だが、私は反省せずにはゐられなかつた。私は、その信用に値するだらうか。

私は、小夜子の相談相手たる資格があるだらうか。

私は小夜子と相對してゐるだけでも、もう胸が騒いでならないのだ。私はもう十分なる理性を以ては小夜子に對しられなくなつてゐるのだ。いや、相談相手になつて呉れといふその信頼はうれしいが、私が、小夜子からきゝたいのは、もつと外の言葉なのだ。」

「私、一度田舎へ行つて見たいと云ひますと、お母さん、お隣の兄さんに伴れて行つていただくならいゝつて云ふんですの。ね、一度、田舎へつれて行つていたゞけない？」

「いつでもお供しますよ。」

「ぢや、此の次の日曜はいかゞですの。」

「此の次の日曜、結構です。」

此の次の日曜はかなり大事な用事があつたのだが、私は、そんな事は忘れて了つてゐた。

「ぢや、お願ひしますわ。私、朝はどんなに早くても構ひません。朝早く出れば日歸りはらくでせう。」

「えゝ、汽車で二時間、それから自動車で三十分ばかり――。」

さう約束したその瞬間から、私は、もうその日の來るのを待ちわびてゐた。

おとづれ

私が小夜子を伴つて郷里を訪ねたのは夏も終りに近い或る日の事であつた。郷里と云つても汽車と乗合とで片道三四時間、らくに日歸りの出來る恰好なトリップといふところだが、小夜

子にとつては、その眼の鼻の間の郷里が、どんなに遠いものに思はれてゐたのであらうか。

「あなたが一緒に行つて下さらなきや、私、何時迄たつてもその機會は得られなかつたかも知れませんわ。ねえ、郷里の人達、私を何と思ふでせう。」

小夜子は、はしやいだ調子で斯う云ふかと思ふと、又、急に沈み込んで、

「何處からかへんな女が來たと思ふかも知れませんわねえ。」

溜息交りに斯う云つて見せたりした。

野の中の小さな停車場で降りると、そこからバス。バスの中でも、村の道を歩き出してからも、小夜子の姿がひどく人の目を惹くのを見ると、私は何となく晴れがましい氣がした。

しかし、道で會つた人々の顏には、二三、見覺えのあるやうなのがあつたが、何んとも聲をかける者は無かつた。私自身も、うも、それほど故郷からは遠い人間になつてゐたのである。

「さあ、愈々來ましたよ。」

と、縣道から、狹い里道にはひつた時、私は小夜子をかへりみて云つた。そこからが、私共の部落なのである。

路傍には夏草が繁つてゐた。天鵞絨の黑地に黃と紫との彩紋を描いた大きな揚羽の蝶が舞

つてゐた。右側には桑畑がだん〳〵のぼりになつて雜木山の裾に續き、その雜木山の裾を緣どり、合歡の林が長く延びてゐた。その花が薄紅のだんだらで、深い綠をぼかして居るのを見ると、

「あゝ、合歡の花ね。私、此の合歡の並木だけはよく覺えてゐます。」

小夜子は、感慨深さうに云つた。

「(この道はいつか來た道―)つて歌がありますわね。だんだん思ひ出されて來ますわ。」

クリーム色のパラソルの蔭に、小夜子の頰は日に蒸されて輝いてゐた。

野道を行きつくすと、右手の丘の上に小さなお堂があり、頭の半分かけたお地藏樣が一體据えられてあつた。

「あゝ、此のお地藏樣にも覺えがありますわ。何とか云ひましたわねえ。此のお地藏樣のこと。」

「化地藏。」

「化地藏！　さうでしたわねえ。だけど、化地藏つてどうしてそんな怖い名がついてゐるんでせう？」

それには一つの傳說があるのだつた。矢張、池の端に關する事なので、それはいつの頃とも

知られてゐないが、池の端の何代目かの主人が、郷士ながら、あまりに威福を恣にして官の怒りに觸れ、一族皆死罪になつた事がある。その刑場のあとに、寃鬼を祀る可く安置したのが此の地藏尊で、化地藏といふのも、さういふ因緣から出た名稱らしかつた。ところで、その時絶えた筈の井上家が、再び家政を盛り返したのは、乳母の家に養はれてゐた、女の嬰兒一人だけが、離をのがれてゐたからで、その小さな一つの種子から、又、根を張り枝葉をしげらせて井上家は前にまさる大木となつたのだといふ事だつた。何しろ傳說としても少し憤然過ぎる話なので、眞僞の程はわからないが、絶えんとする井上家の血統を一縷の糸につなぎとめたといふ意味では、小夜子の存在はその嬰兒のそれを思はせる。一縷の糸――しかも、それは、華やかな糸なのだ。

しかし、私はその話はしなかつた。唯、その化地藏の上につゞく林の中に井上家の墓地がある事を云ひ、歸りにおまゐりをしようと云つた。

「ええ、私もそのつもりよ。」

と小夜子は答へて、手にした小さな風呂敷を見せて、

「お香を買つて來たのよ。お花は何かその邊ので間に合はせる事にして。」

その長方形の風呂敷包は、では、お香であつたのか？　何だらうと思つてゐた私は、さてはとうなづき、うなづくと共に何か强く心を打たれた。

「おゝ、邦夫さん。」

部落にはひると、さう聲をかけるものがあつた。――小學校の同級だつた欣之助で、秋蠶の桑を摘みに出たらしく、大きな筵を抱へてゐた。

「お歸省かね。」

と口では私に云つてゐるのだが、眼は、小夜子に釘づけにされてゐた。

「一寸かへつて來ました。此のお孃さん、何人だかわかりますか？」

私も微笑しながら、かう欣之助にきいた。

欣之助は、馬鹿のやうにぽかんと口を開いて、わからないと眼で答へた。

「池の端のお孃さんですよ。」

と私が云ふと、

「池の端の――？」

どうもうなづきかねるといふ風だつたが、

「あゝ　彌右衛門爺さんの――。」
頓狂な聲でかう云ひかけて、慌てゝ、
「彌右衛門旦那の――？」
と訂正した。が、田舍人らしい無遠慮さでまじ〳〵と眺めるその視線には、小夜子も少なからず辟易したらしい。お辭儀をした頭を伏せたなり、耳の根まで赤くしてゐた。
私は先づ小夜子を私の家に案内した。突然の事だつたので、私の家でも皆びつくりした。
「まあ、まあ、いつの間にとんなきれいなお嬢樣になつて――。」
私の母などは、一目見て小夜子の美しさに征服されてしまつたらしい。美しいばかりで無く言葉少なながら、應待などのはつきりした、十分に禮節のある小夜子の態度を見ては、何人があの蜘殼町の裏長屋育ちだと思ひ得よう。
私は、私自身までが何か誇らしい氣持がしてならなかつた。
私の家と邸つゞきになつてゐる池の端の邸あとへ、私は小夜子を案内した。
「こゝいらが土藏のあとですよ。おぼえてゐますか、鷹の羽の定紋を打つた白壁の土藏が三戸前、ずらりと並んでゐたものです。」

とか、
「あの小高くなつてゐるのが、築山のあとです。源平に咲き分けた紅白の躑躅が僕が村を出る頃はまだ一株だけ殘つてゐましたが、もうなくなつたやうですね。」
とか、足元からバツタの飛び出るやうな夏草の繁みを踏みわけながら、私が說明する。小夜子は無言のうなづきでこたへながら、夢見るやうな眼眸であたりを眺めまはしてゐた。朧氣に浮んで來る幼き日の記憶が、一つの映像になつて、その眼に描き出されてゐるのであらう。
「築山の前に池がありましたね。その池ももう埋められてしまひましたが、泉水の水だけは不思議に絕えずにゐますよ。ね、ちよろ〳〵と水の音がするでせう。」
「本當に水の音がしますわ。」
小夜子はじつとその水の音に耳を傾けた。靜かな眞晝を、しのびやかだが、紛れるものもなく耳に入つて來るその水の音、私はその水の音の中に、井上家代々の靈のさゝやきをきいたやうに思つた。
さうだ。此の水の音は永久に絕える事は無いであらう。
低徊し、顧望しつゝ、私共はその邸趾を、桑畑となり、玉蜀黍畑となつたその廢墟を、しば

らくの間歩き廻つた。そして、山道傳ひに、寺の前へ出、あの化地藏の丘つゞきの井上家の墓地をたづねた。そこには、信之夫婦の墓も、道也の墓もあつた。途中で折り取つた遲咲の百合や桔梗が、小夜子が持參した線香と共にそれ等の墓の前にも手向けられた。

「道ちやんといふ子、本當にかはいさうな事をしましたねえ。」

その部落の人々の手に建てられた型ばかりの小さな石碑の前に立つた時は、小夜子は涙ぐんでゐた。

「私はもう墓參にも行けないが、お前、私の代りによく拜んで來て呉れと、父が呉々も申しましたわ。父もいづれはこゝの土になる事でせうけど――。」

小夜子は、草に荒れた墓地を見渡しながら斯う云つた。

私共は墓から又裏の山路傳ひに私の家に引きかへした。私の家の門口には、近所のお上さん達や娘達が、大袈裟に云へば黒山を築いてゐた。東京から彌右衞門爺さんの娘がやつて來たといふニュウスは、それからそれへとすぐ村ぢうにひろがつてしまつたのだ。彌右衞門爺さんの娘？　さうさう、あの後家入りのお榮の腹に一人の娘があつたつけ？　と、はじめてその忘れてゐた存在を思ひ出し、一體どんな娘になつてゐるかと、むしろ輕蔑的な好奇心を以て見物に

來た村の女たちも、小夜子のその美しさを見て、すくなからず驚いたらしい。相顧みてさゝやく彼等の顏に、はつきりとそれが――その驚きが浮んでゐるのを私は見た。

私の父は信之が好きだつたし、私の母は何人よりも深い信之の妻のお靜さんの同情者で、小夜子の母のお榮さんには強い反感をもつてゐた一人だつたが、前にも云つた通り最初の一目ですつかり小夜子にまゐつてしまつて、

「本當にまあいゝお嬢さん――。」

と、いゝお嬢さんの百萬遍で、午餐の支度をしたり、茶菓をすゝめたり、都合がついたら泊つて行けとまで行つて引きとめたのだが、さうもならない。私共は日が傾きかけた頃に歸途についた。

それにしても、私が小夜子と二人で歸省した事を人々は何と思つたであらうか。男と女とがつれ立つて歩けばもうそれに何かがあるときめて了ふのが田舍人の常識だ。外の人のおもはくはどうでもいゝが、私の父や母は何と思つたのであらう。――實は、小夜子に誘はれて同行を承諾しはしたものの、私はそんな考へでかなり躊躇してゐたのである。しかし、それは全く杞憂に過ぎ無かつた。父は笑ましげに小夜子を眺めながら、

「小夜子さん、あんたはお祖母さんにそつくりだて。あんたのお祖母さんといふ人には、私など、子供の頃はずゐ分かわいがられたものだがね、それはきれいな人だつた。そのおばあさんに瓜二つだ。血といふものは不思議なものだ。」

かう云つてゐたが、その何も彼も受け入れたやうな寛大な眼眸には、二人の關係を事實以上に想像した上で、それを許してゐる氣持が讀みとられた――と、さう思ふのは、私の思ひ過しだけであつたらうか。父は又斯うも云つた。

「私もな、暇があつたら彌右衞門さんの樣子も見に行きたいが、何分、東京といふと、眼と鼻の間でつい臆劫でな。――池の端とうちとは、まあ親類も同じ間柄なのでな。邦夫、お前も何彼と小夜子さんの相談相手になつて上げるがいゝ。」

歸途りは汽車の中で日が暮れた。

「よかつたわ、邦夫さん、あなたのおかげで――。」

と、小夜子はくりかへして云つた。そして、

「いゝ方ねえ、あなたのお母さんも、お父さんも――お母さんの拵へて下すつたお蕎麥、本當においしかつたわ。いゝわねえ、田舍は。私、もう一度是非お訪ねしたいわ。私の家はなくなつても、あんたのお家の、あの大黑柱――つて云ふんでせう、太い柱ね、あの柱のそばへすはると、自分のうちのやうに氣持がおちつきますわ。あなたのお父さんやお母さんを見ると、もう一人のお父さんやお母さんがいらしつたやうな氣がして――。」

さう云つて見せたりした。

私は、それ等の言葉を無心には聞き流せなかつた。私がもう少し押しの強い人間だつたら、こゝに一つの機會を摑めたかも知れないが、しかし、私は、この場合の彼女の感情を、さうした方向に誘導しようと試みるほど恥知らずになれなかつた。小夜子は、汽車の窓に凭り、暮れゆく武藏の野面を眺めながら、小聲に歌つてゐた。

（此の道はいつか來た道――。）

新宿に着くと、私は、小夜子を彼女の家まで送つて行かうとした。が、彼女はそれを辭退した。そして、

「本當はね、今日、田舍へ行つた事は、父にも內證でしたの。」

「さうですか。お父さんは御承知ぢや無かつたのですか？」
「本當は、さうなの。ごめんなさいね、うそを云つて――。」
「いゝえ、それは構はないが――。」
「でも、歸つたら正直に云はうと思ひますの。叱られなんかしないと思ひますわ。今日はね、唯、邦夫さんと遠足に行くと、さう云つて出て來たんですの。」
「さうですか？」
私はそれ以上、何と云つていゝかわからなかつた。
聰明な小夜子は、父と郷里との關係、郷里に對する父の氣持――これを、かなりこまかいところまで知つてゐる。知つてゐるといふよりも感じてゐるらしかつた。
で、その夜は、家まで送らずに途中でわかれたが、二三日して勤めの歸りに立寄つた小夜子は、
「話しましたわ。そしたら、父は、矢張よろこんでゐました。そして、いろ〳〵の事をそれからそれへときゝたがつて――。母も、それはよかつたと云つてゐました。唯ね、母は、なぜ、もつといゝ着物を着て行かなかつた、お土産ぐらゐ持たせてやつたのになんて云つてゐました。」

笑ひながらさう告げた。
兎に角一緒に郷里を訪問して以來、小夜子と私との間が、ぐつと接近して來たのは事實である。小夜子は、私を呼ぶに、時々「兄さん」といふ言葉を以てした。母がさう云ふんですからと、辯解をしながら、「兄さん」と呼ぶ小夜子の言葉が、どんなに私の胸を躍らしたかは云ふまでも無からう。
私の小夜子に對する情熱は次第に募つて行つた。それと共に、嘉市といふ者の存在が、次第に邪魔つけなものになつて來た。嘉市は、その後、もう一度訪ねて來たが、
「小夜子さんをつれて田舍へ行つたんださうですね。」
さういふ嘉市の言葉には、詰るやうな響があつた。
彌右衞門爺さんも、お榮さんも、私に慥かに好意を持ちつゞけてゐる。小夜子は勿論だとすると、他に障碍は無いわけだが、問題は嘉市だつた。小夜子を獲る爲めには、嘉市といふ邪魔者を何とかしなければならない――。はづかしい事だが、私は眞劍にさう考へるやうになつた。

明眸

その年の十二月私は、第二作を發表した。これは、私が出京當時の、部落の事情を自叙傳風に描いたもので、百枚ばかりの力作だつたが、世評に毀譽相半ばし、私が期待したほどの反響は得られなかつた。しかし、私は此の作によつて、文壇的存在をいくらか確實にする事が出來、ぽつ〳〵と雜誌からの註文も來るやうになり、翌年の二月、三月とつゞけて作品を發表する機會を惠まれた。いづれも、農民離村のすがたを描いたもので、その農民離村の、社會的意義にまでメスを入れるだけの鋭さは無く、徒らに牧歌的な感傷を惹にした作品だつたことを、殘念ながら私も今自認してゐる。それに、都會的な感覺のみが尊重されてゐた當時の文壇に於て、私の出世が華々しいものでは無かつたとしても、決して不平の云へた義理では無かつたが、當時の私としては、新進作家につきものの不安と焦躁とに、寧ろ憂鬱な毎日を過してゐたが、此時、私を慰め、力づけてくれたものは小夜子だつた。

「私には文學のことはわかりません。でも、いゝぢや御座いませんか。私、今度のも、迚も好き。何遍くりかへして拜見したか知れませんわ。」

小夜子は然う云つてくれた。その言葉には僞りは無かつた。私は、私の作品が、どんな惡評の底に埋もれようとも、小夜子といふ一人の愛讀者がある事で十分報はれるとさへ思つてゐた。そして、私は書き續けた。そのうちに、私は認められるとも無く認められ、どうやら、一人前の作家として文壇に登錄されるやうになつた。

或るものずきの出版者の手で、未發表の習作をも併せて、私の最初の短篇集が出版されたのは、その年の六月の事であつた。

二三の友人の好意により、さゝやかな出版記念會が、神樂坂のレストランで擧げられた時は、小夜子も出席してくれた、

「私、はづかしいわ。出たい事は出度いけれど――。」

と云つてゐたので、まるで期待してゐなかつた小夜子が、開會間際に、ひよつこりと姿を現はしたのである。これは、私にとつてのよろこびであつた以上に、出席者一同にとつてのおどろきであつたらしい。十數人の出席者一同の眼が、美しい小夜子に向つてみはられたのを見て、私はひどく誇らしい氣がしたものだが、テエブルスピイチに立つた一人が、いくらかの醉に驅

られて、

「……僕は、山岡君の處女出版を祝福すると共に、こゝにいらッしやる一人の美しいレディ——思ふに、その方こそ、山岡君のよき創作の原動力であり、又、山岡君の將來の文學者生活の好伴侶でもあるらしい。そのレディの爲めにも乾杯したいと思ひます。」

などとやり出した時に、私は眞赤になつてしまつた。が、小夜子は、安外平氣で、唯、にこやかに笑つてゐた。

座が崩れると酒興に乘じた友人たちは、口々に私をからかひはじめた。

「山岡君、素晴らしいぢや無いか、一體あれは——。」

といふやうな調子で、しまひには否應なしに、小夜子を私の愛人に仕立てあげてしまつた。

幸ひ、小夜子は逸早く引きあげて、もうそこにはゐなかつたからいゝやうなものゝ、もし小夜子が居たら、私はどんなに閉口した事であらう。

會の日から五六日經つてから小夜子はたづねて來たが、

「どうもみんな無遠慮な連中で、御迷惑だつたでせう。」

と私が云ふと、

「いゝえ！　面白う御座いましたわ。」

と小夜子は相變らず靜かに微笑しつゞけてゐた。

小夜子の好意は爭はれ無かつた。好意以上のものが用意されてゐる事も慥かだと思はれて來た。私は更に一歩を踏み出す可きであつた。が、それが私には出來無かつた、といふのは、私に勇氣が無かつた故ばかりでは無い。どんな厚顏な男性にも、たやすく一指をも觸れさせない一種の威嚴を——處女の威嚴を、小夜子は有つてゐたのである。

それに、一方には、無視する事の出來ない存在として嘉市がゐた。嘉市は、會社の往復にも屢々小夜子と顏を合はせてゐるらしいし、又、繁々と小夜子の家を訪ねて行くらしかつた。不俱戴天のおもひを抱きながら、さうして深仇の許に伺候する嘉市の心、私は、その心を思ひやつて見ずにはゐられなかつた。私を苦めるのは、藝術の惱みばかりでは無かつた。小夜子についての私の惱みは、それよりももつと強いものになつて行つた。

十日に一度、時には一週に一度ぐらゐの割合で私を訪ねて來れた小夜子が、どうしたのか、もう二十日近くも顏を見せない。不安の思ひに鞭打されて、私が、蝸殼町の家を訪ねて行つたのは、八月も半ばのある夜の事であつた。四度目か五度目の訪問だつた。

小夜子は相變らずの笑顔で迎へて呉れた。別條も無いらしいと見て、私は安心したが、彌右衛門爺さんは、此の頃どうも工合がよくないらしく、昏々として眠つてゐた。お榮さんは、その寢顔に眼をやりながら、

「この人も、もう駄目でございますよ。」

と肩をひそめてさゝやいて見せた。が彌右衛門爺さんは、そのうちに眼をさまして、寢床の上に起きあがると、

「あゝ、邦夫か、まあ、こゝ來て坐れ。」

例の高飛車の調子だつた。二語三語話してゐるうちに、玄關の格子戸が鳴つた。土間に立つたのは嘉市だつた。

「や、邦夫さんか。」

嘉市は私を見ると、きらりと眼を光らせた。私の心も途端に硬直した。瞬間、嘉市の眼から激しい敵意が迸つた、と思つたのは、決して私の思ひ做しばかりでは無かつたであらう。

嘉市は上り框に突立ち、しばらくの間もぢ〳〵してゐたが、

「來たのか、嘉市。何を愚圖々々して居る。」

彌右衛門爺さんにさう云はれると、のそりとあがつて來て私の傍に坐り、

「どうですか？　御工合は？」

乾いた聲で、彌右衛門爺さんに云つた。

「工合はよくない。だが、まだまだ。まだまだ私はまゐりはせんぞ。」

老人はたるんだ瞼の間から、嘉市を睨みつけるやうにしたが、

「嘉市、お前は何しに來るのだ？」

眞甲からきりつけるやうに云つた。

「……」

嘉市の顏にはさつと血がのぼつた。

「此頃、毎晩のやうにやつて來るが、何か私に用があるのか？」

「お見舞にうかゞつてゐるんです。」

「見舞？　見舞とは口實だらう。見舞をかこつけに斯うして毎晩やつて來るお前の本心は、私にはちやんとわかつてゐるのだ。」

もつれる舌を振りほどきながら、老人は意氣惡げな調子で疊みかけた。

「お前、わしの娘をねらつてゐるな。な、さうだらう？」
「お父さま。まあ、何を仰有るんです？」
と、小夜子は慌てゝ聲をかけた。
「お前は默つてろ。私にはちやんとわかつてゐるのだ。此の男の本心がどこにあるかくれえ、ちやんとわかつてゐるのだ。おれはまだ、それほど耆碌はしてゐ無えのだ。」
「阿父さん。」
と、小夜子は飛んで來て、老人の肩に手をかけるやうにして、
「八木さんは、お父さんのお身體を心配して、それで見に來て下さるんぢやありませんか、そんな事仰有つちや。」
「馬鹿！　それだから、お前など、まだねんねえだといふのだ。此の男がやつて來るのは、みんな、お前を眼當なのだ。——嘉市、井上彌右衛門も今こそ斯うしておちぶれてゐるが昔の事を考へろ！　世が世なら、お前などは、おれの前には土下座をしなけりやならねえ人間なんだ。いや、痩せてもかれても、おれは井上彌右衛門だ。小夜子は井上彌右衛門の娘だ。お前などに指一本さゝせる事ぢやあ無えのだ。」

老人は尖つた肩を搖つて喚き出した。
「大それた奴といつちや無え。水呑百姓の小倅の分際で、此の彌右衛門の娘に思ひをかけるなんて、飛んでも無え奴だ。」
「お父さん！　今夜は又、急にそんなことを——」
小夜子は、はら〳〵して、身を押揉んでゐた。
「前から云はうと思つてゐたのだ。今夜ははつきりと云つて置く。お前なんどに小夜子はやれねえ。いや、指一本さゝせる事ぢや無えから、さう思へ。——小夜子、一體、お前が甘過ぎるのだ。八木さん八木さんと友達扱ひにするから、愈々身のほどを忘れてつけあがるのだ。」
嘉市は、兩手で膝頭を摑み、全身わなわなとふるへてゐる。汗ばんだこめかみに、太い靜脈がびく〳〵と動いてゐた。
「歸れ、歸れ！」
老人は斯う云ふと、ぜい〳〵とあえぎながら、どろりと横になつてしまつた。
「八木さん、御免なさいね、父は、此頃ひどく機嫌が惡くなつて、時々、へんな事を云ひ出して、私どもも困つてゐるんですの。」

小夜子は、嘉市に寄り添ふやうにしてわびた。嘉市は、眼を小夜子に向けて、涙ぐんだ横顔をじつと打戍るやうにしたが、突然、すつくと立ちあがると、

「失禮します。」

そゝくさと靴を穿き、不規則な足音を立てゝ出て行つた。

「ごめんなさいね。八木さん。」

さう云ひながら、入口まで送り出した小夜子は、座に戻ると、

「困るんですの。」

訴へるやうな眼で私を見た。私は何と答へていゝかわからず、何だか、ひどく居辛くなつてしばらくそこに坐つてゐたが、老人は、又昏々と眠りはじめて、いつ覺めるとも見えなかつたので、私はお榮さんが、

「まあ、まあ——」

と引きとめるのもきかずに辭して歸る事にした。

小夜子は、一寸そこまでと云つて、私に跟いて出て來た。

「困るんですの。お父さん、あんな事を云つて——八木さん怒つてお了ひになつたわ。」

肩を並べて歩きながら、小夜子はつぶやき、語尾を深い溜息の中に消した。

「嘉市君、本當に、そんな氣があるんでせうか。」

「そんな氣ッて？」

「嘉市君があなたを愛してゐる——それは本當なんでせう。」

私は思ひ切つて、斯う、一歩踏み込んで見た。

「それは、私にはわかりません。」

「わからない事は無いでせう？　何かのゼスチュアで、さうならさうと、わかる筈だと思ふけれど——」

「……。」

「あなたは一體、嘉市君をどう思つてゐるんです。」

「深切ないゝ方だと思つてゐますわ。それに鄕里の方だと思ふと。——」

「嘉市君は、矢張、あなたを愛してゐるんですよ。僕にはわかつてゐます。」

「あなたに、八木さん、何とか仰有つて？」

「いや、別に、何とも云やしないんですが——。」

「もし、本當にさうだつたら、私、困るわ。」
「困る？どうしてです？」
「だつて、私、あの人、いゝ人だと思つてますけど、唯、それだけの事なんですもの。」
「唯、それだけ？」
「えゝ、唯、それだけ。」
と、小夜子はこつくりして、
「私、何も、父のやうに、あの人が小作人の子だからとか、職工だからとか、そんな理由から云ふのぢやありません。でも、私まださういふ――結婚などといふことは、考へて見た事もないんですもの。」
「さうですか。ぢや、嘉市君は、かあいさうに片思ひといふわけか。」
「あら、そんな――。」
小夜子の顔が赫らんだ事は、夜目にも、それと見てとられた。
それから、私は、しばらく小夜子と共に歩いた。縁日らしい人ごみの中を、重苦しく押默つてあるいた。

そこにも一つの機會があつたかも知れない。
私は、小夜子の耳に囁く可き言葉が、胸の中に渦卷いてゐるのを感じた。
が、それを唇にのぼせる勇氣は矢張無かつた。
悄々と歸つて行つた嘉市のことを考へると、私の勇氣は崩折れたのである。
とある停留所で私は電車に乘つたが、小夜子は、電車が動き出すまで、そこに立つて私を見送つてゐた。
その時の小夜子の、うるみを帶びた美しい眼の色が、不思議に胸にしみ入るのを覺えたのだ。

大震災

私が東北の旅に出たのはそれから二三日經つてからであつた。飯坂、上の山の溫泉に一浴して、秋田、青森、海を越えて函館、札幌と巡遊し、歸途松島に立寄りそこで一泊したのが八月末日であつた。大正十二年九月一日のあの關東大震災を知つたのは、その日の夕方、島めぐりの遊覽船から降りた時であつた。

交通が杜絶し、東京に入る事は容易でなかつた。大迂回をして中央線をとり、郷里の家に二三日足をとどめてゐる間も私は氣が氣で無かつた。東京は殆ど全滅、殘されたのは山の手の小部分だけといへば、蠣殼町の小夜子の家が無事なわけは無い。夥だしい死傷者のうちに、小夜子も交つてゐるでは無からうか？

私はどゝで白狀する。私の憂慮は唯一人の小夜子に係つてゐた。東京がよしどうならうとも小夜子だけが無事にゐて呉れたら。

村の出身者の東京から逃げ歸つた者も少くなかつた。私の部落の中で、「鼓屋」といふ屋號をもつた家の次男坊も着のみ着のまゝのみじめな姿で、女房子供を引きつれて歸つて來てゐた。

「さういへば、池の端の爺さんはどうしたらうな。いくら爺さんが强情でも、かういふ時は村の外に頼る處は無え筈だ。無事でゐるならやつて來さうなものだ。いや、身動きも自由で無かつたさうだから、逃げそこなつてしまつたかな。」

父は心配さうに云つた。が、私にして見れば彌右衞門爺さんなんかどうでもよかつた。小夜子さへ無事でゐて呉れたら——。

その私の憂慮をも十分察してゐるといふ風に、私が東京へ歸ると云ひ出すと、父はかう云つ

た。

「うむ。歸つても仕方はあるめえが、まあ、樣子を見て來るがいゝ。小夜子さんと云つたなあの娘は若い者だ、まさか燒け死んだわけであるめえ。」

幸に、私の下宿は災禍を免れてゐたので、兎も角もそこに落ち着く事が出來たが、大東京の殆ど全部が燒野原になつて了つた慘狀は、想像以上のものであつた。激しい殘暑の陽に燒かれながら、まだ搖れ止まぬ大地の上を、家を失つた人々は悲しみの極みの放心狀態で唯徒らに右往左往してゐた。その人々の手には、尋ねる人の名を記した小旗がかざされてゐた。旗こそ持たなかつたが、私も毎日尋ね歩いた。もう燒けトタンのバラツクがところ〴〵に出來てゐたが、それを隈なくのぞき歩いた。すべてが無駄だつた。もし無事ならば私のところに何か連絡が無いわけは無い。彼女も矢張犧牲者の一人になつてしまつたのであらうか？

あの池の端の最後の者、あの美しい小夜子もとうとう——。私は灰燼の中に身を投げつけて慟哭したいやうな氣がした。

小夜子の母のお榮さんの生家も、もう久しい前に絶家してゐた。しかし、遠い親戚は村に殘つてゐる筈だ。その方に何とか消息は無かつたらうかと私は父に照會を頼んだが、父からの返

事には一向沙汰無しといふ事であつた。

もう九月も末、一月も絶つのに、全く行衛が判らないのは矢張一家全滅と見る外は無い。——

私は絶望した。

十月に入つてからのある日の事、私は堪えがたい憂愁を抱いて牛込見附の濠端を歩いてゐたさうしてぶら〳〵とあてもなく歩き廻るのが癖になつてしまつたのである。漸く開通しはじめた電車が柩車のやうにのろ〳〵と動いて行くのを濠の向うに眺めながら、左門坂の下あたりまで歩いて行つた時、折からの彼誰時を、影のやうに往來する人影の中に私は一人の男の姿を見つけた。

「嘉市君。嘉市君ぢや無いか」

「や、邦男さん。」

嘉市は、別に驚いた風も無く、例の深く沈んだ調子で云つた。

「無事でしたか。」

「僕は丁度旅行中だつたのでね。——小夜子さんたちは何うしたか君は知らないか。」

「無事です。」

「え、無事か、皆、無事か。」

「えゝ。」

その冷靜さは、私の度を失つた狂喜のさまをあざけるやうに見えた。

「どうしてゐます？　どこへ避難してゐます。」

「この直ぐ近所です。二三日前までは市川の方へ避難してゐたんですが、そこで知り合つた人が親切に云つて呉れるんで、みんなで厄介になつてゐるんです。」

「然うか？　それは宜かつた。僕は隨分探したんだ。いくら探してもわからないんで、みんなやられて了つたのかと思つてゐたんだ。」

「あの邊は火の廻りも早かつたですからね。」

と、相變らず、氣乘りのしない調子で嘉市は云つた。

「矢張運があつたんですよ。被服廠などへでも逃げ込んだらおしまひでした。尤もお榮さんは足に怪我をしました。——彌右衛門爺さんも、すつかり駄目になつてしまひましたがね。」

「外の人は兎も角、彌右衛門爺さんはあの身體でよく逃げられたもんだなあ。」

「どうせ、もう長い事は無いが——。」

と嘉市はつぶやいたが、

「あなたは矢張あの下宿にゐるんでせう。」

「さうです。二週間ばかり前に戻つて來た――。」

「小夜子さん、訪ねて行かなかつたですか。」

「いや――。」

「さうですか。訪ねて行くと云つてましたがね。尤も、此方へ歸つて來てからまだ五日にしかなら無えんですが――。」

「この近所ツて何處にゐるんです?」

「此の坂を上りつめて、左へ曲つて二軒目の、深野ツて家です。大きな家だから直ぐに判ります。」

その家の親戚の一家が矢張下町に住んでゐて、市川の方へ避難してゐたところ、その深野家から迎へに來た。そして、病人を抱へて困つてゐる小夜子たちに同情し、この際遠慮は要らないからあなた方も一緒に、といふ事で、その一家と共に引取つて呉れたのだと嘉市は説明して、

「ちや、失敬します。」

とそのまゝ立ち去らうとする。それを呼びとめて、

「嘉市君、君はどうしてゐるんです。」

「知らない家に僕まで厄介になるわけにやいきませんからね。僕あ、此の近所の知つた奴の家に轉がり込んでゐます。」

私は嘉市に別れると、一足づゝがもどかしい思ひで坂をのぼつて行つた。無事だつた、小夜子は死にはしなかつた！　私の胸はわッとよろこびの聲をあげてゐた。

避難者を收容した家は落着無くごたごたしてゐた。井上さんなら此方です、と云つて案内されたのは、門に續く石塀の内側に寄せて建てられた別棟の小舍――多分運轉手か何かの爲めに建てられたらしい粗末な小舍であつた。

先づ飛び出して來たのはお榮さんだつた。

「まあ、邦男さん！」

お榮さんは私の顏を見ると、いきなり、ぽろぽろと涙をこぼした。お榮さんは、まだ、生死の瀬戸際からのがれ出した者の昂奮の中に居た。

「今、そこで嘉市君に會つて、ここにいらッしやる事がわかつたんです。此の二週間ばかりの

間、僕あ、毎日あなた方を探し歩いてゐたのですよ。」

「まあ、左様で――。」

と云ひながら、お榮さんは、何かひどくおづおづとした樣子でそこへ出て來た小夜子をかへりみて、

「だから、小夜子。一刻も早く邦男さんにお知らせするやうにツて、あれほど私が云つたのにさ。」

「私もさう思つたんですけども。」

小夜子は低くつぶやいて面を伏せた。流石にやつれを見せてゐたが、小夜子は、矢張咲き立ての花のやうに美しかつた。

私は請じ入れられた。一間きりないその部屋の、もちろん借物らしい蒲團の上で、彌右衞門爺さんは眠つてゐた。血の氣の無いその顏も、その身體も、ひどく小さくなつたやうに見えた。

「この人が一番呑氣ですよ、寢てゐさへすりやいゝんですからね。」

と、お榮さんは、むしろ怖々しげな眼で、一寸彌右衞門爺さんを見やつたが、

「本當にまあ、何て怖ろしい事でせう。斯うして助かつたのが不思議な位ですよ。私共身一つ

なら兎も角も、斯ういふ病人を抱へてゐるでせう？　愚圖々々してゐるうちに、もうすつかり火の手は廻つて來る。こりや駄目だと思ひましてね、私は此の人と一緒に死ぬ覺悟をしたんですよ。小夜子に、お前だけは逃げておくれと云ひますとね、この子つたらまあ、死ぬなら私も一緒にツて動かないんでございますよ。」

例の上唇と下唇を叩き合はせるやうな調子で、お榮さんは息忙しく語りつゞける。その當座人々は、よるとさはると、一種の熱狂を以つてその當時の事を語り合つたものだが、その、お榮さんの話もそれだつた。

「お逃げ！　お逃げ！　と、私は小夜子を突き飛ばすやうにしましたが、お父さんを見捨てゝ逃げるわけには行きません。阿母さんこそ逃げて下さいなんて、小夜子はじつと坐つてゐるんですよ。そのクソ落着の落着きやうツたらいつそ憎らしい位でしたがね。」

「それで、よく助かつたんですね。」

「奇蹟が起つたんですわ。」

默つてゐた小夜子が、その時囁くやうに云つた。

「奇蹟？　どうしたんです？」

「嘉市さんが飛び込んで來て下すつたんですの。お父さんは僕が伴れて逃げる。あなた方もお逃げなさいと云つて、嘉市さんは、父を横抱きにかゝへて飛び出したんですの。その時は、露地一ぱいに煙がうづまいて、一寸先も見えない位でした。私はお母さんと手を引きあつて、轉んだり起きたり――もう何も彼も夢中でした。唯、嘉市さんの背中ばかりを見つめて走れるだけ走りました。」

小夜子は、何か朗讀でもするやうな調子で語つた。

「さうですか？　そりや宜かつた！」

嘉市が彌右衞門爺さんを助けたのか？　あの不倶戴天の深仇である筈の彌右衞門爺さんを。そして、あの夜、あのやうに激しく彼を侮辱した彌右衞門爺さんを。いかにも、それは奇蹟でなければならない。

「あの人が助けに來て下さらうとは思ひがけませんでした。父が失禮な事ばかり云ふので、あれからずつとお見えにならなかつたのですけど――。」

小夜子は感慨深げな調子で云つた。

「兎に角、まあ、あの人のおかげで危いところを助かりました。何處を何う逃げたのやら全く

夢中で、氣がついた時は、船の中にゐました。」

とお榮さんはつゞけた。

「この人と云つたら、まるで死んだやうになつて、時々眼をあけてはきよろ〳〵とあたりを見廻すばかりでしたが、それでも氣がついたと見えて、嘉市か、おれをかつぎ出して呉れたのはお前か――さう云つたきりお禮一ついふ分別も無いんですよ。でも、それからが又大へん！　市川の避難所におちついたのは、それからまる三日たつてからでしたよ。」

「そりや大變でした！　だが、何にしても御無事で、こんな嬉しい事はありません。僕はあの時丁度旅行中だつたんです。」

と、私は何かいきりたつた氣持で云つた。

「僕が東京に居さへすりや、何は措いても馳けつける筈でしたがねえ。」

「飯坂から頂いたおハガキで、御旅行の事は承知致して居りました。」

小夜子は、眼を伏せて云つた。

「ですが、さういふ激動の中で、お父さんの御工合は何うなんです？」

お榮さんが小夜子の代りに答へた。

「もうすつかり弱つてしまひましてね。どうせもう……とは思ふんですけど、何しろ呆れる程しんねり強い病人ですよ。」

「しかし、まあ、宜かつたです。」

それが見知らぬ家の運轉手小舎にしろ、井上家の主、我が郷里の大長老は疊の上に死なす可きである。此の老爺を震火の中から救つたのは、何と云つても嘉市の大手柄といふものだ。私は、心から嘉市に感謝する氣になつた。が、その時、小夜子が、

「本當に八木さんのおかげでございますわ。」

とくりかへして云ふのをきくと、私は三斗の苦汁を嚥まされたやうな氣がした。私はなぜ、旅行になど出てゐたらう？　何故東京にゐて、その時眞先に小夜子の許に驅けつけ無かつたらう。」

「だが、いつまでも斯うしてこゝにゐるわけにも行かないでせう。と云つて、東京もかういふ大混亂の中ですから――。」

と、私は考へ考へ云つた。

「どうですか？　田舎へお歸りになつたら？　自動車でゆつくりと運ぶやうにしたら、御病人も大丈夫でせうが――。」

「私もね、村には、親類もありますし――長い事無沙汰にはなつてゐますけれど、何と云つても此際だから、田舎を頼らうと思ひましてね、この人にも然う云つたんで御座いますが、此の人、どうしてもきかないんですよ。村には死んでも歸らんと强情を張りましてね。」

お榮さんの言葉を受けて、小夜子は云つた。

「父の氣持、私にはわかりますわ。みじめな姿を村の人達の眼にさらす事が父には一番辛いんですの。」

「さうですかねえ。」

「でも、骨だけは、あの墓地へ持つて行つて呉れとさう云つて居ります。」

小夜子は更に一段と聲を低めて云つた。小夜子の眼は涙で光つてゐた。

「しかし、斯うしていらしつて、ずゐぶん御不自由でせう。」

「どうせ、いつまでもこゝに居るわけには行きませんがね、嘉市さんが種々と心配して呉れるので、さしあたり困る事もありませんよ。」

お榮さんは、彌右衞門爺さんと同樣、あの小作人の子を明いた眼では見てゐなかつた筈だ。

だのに、今は、「嘉市さん」といふその言葉の中にだけでも、深い信頼が溢れてゐた。その筈だ、嘉市は、彼等にとつて命の親なのだし、その日以來今日の日まで、彼等は、唯、嘉市一人を頼りに過して來たのだから——。

今や、嘉市は、小夜子に對して絶對有利な地位を獲得したのだ。私は負けたのだ！

小夜子の無事をよろこぶ喜びも、此の敗北感の下で押し殺されて了つた。私は、快々としてたのしまざる心を抱いて、そこを辭した。

運命

私は早速入院の手配をしたが、諸事混雜の折柄然る可き病室を見つける爲めにそのあくる日の一日を費した。そして、やうやく、そこへ運び入れたと思ふと、まる一日とたゝずに彌右衛門爺は死んだ。

村の老酋長は、壞滅した大都の片隅で、まだ搖れやまぬ大地の上で、遂にその眼を閉ぢた。臨終は、靜かであつた。物の云へなくなつた彼の、喘ぐが如き眼眸は、私にでなく、嘉市の方へ向けられてゐた。

「ありがたう。」

その眼は、然う云つて居るやうに見えた。

私の父はじめ、組合の者二三人が遺骸を引取りに出て來た。彌右衛門爺は、屍となつて村に歸り、あの化地藏の傍の井上家累代の墓地に葬られた。信之や道也のそれと並んで立てられた墓標を眺めて、私の父は斯うつぶやいた。

「斯うなりやあ、もう一切御破算だ。三人で仲良く婆婆の話でもしてゐるだらうさ。」

小夜子が、公式に村びとの前に姿をあらはしたのも、此の時がはじめであつた。

「相變らずだな、あの後家入は。相變らずよくしやべる。」

と、一緒に來たお榮さんには、冷たい眼を向けた人々も、小夜子の美しさには驚嘆の眼をみはらずにはゐられなかつたらしい。

「あれが、お榮の腹から出た娘とは思はれねえ。なるほど、眼鼻立はお榮に似てゐるが、あの上品さはどうだ。矢張、お嬢樣としか呼べ無え氣がする——。」

東京は不死鳥のやうに灰燼の中から起ちあがつた。高く響く鑿の音、焦土を掩して建てつゞけたバラツク——人々は皆、非常な意氣込で生活の建直しをはじめた。

私の父は、當分、田舍にゐて、東京の樣子を見るやうにと小夜子たちにすゝめた。此際だ、遠慮する事は無い、せめて一月二月の間なりと、私の許で——といふ言葉をつくしてのすゝめを、勤めがあるからと云つて固辭した。小夜子は、葬式をすますと直ぐに、上京し、バラツク住居の中から、日々の仕事に通ひはじめた。

今こそその時だと私は思つた。私もどうやら一家を支へるぐらゐの收入は得られさうになつてゐたので、小夜子に結婚を申込み、小夜子と結婚する事によつて、母子の生活を安定させる事も出來ると思つた。問題は小夜子が井上家の一粒種であり、私も山岡家の長男である事だが、しかし、やがて生れるであらう子供に井上家をつがせる事にするといふ方法もある。私の父はそんな點にも十分な諒解を示してゐたし、お榮の氣持は前からきまつてゐるらしい。

私は、たゞそれを云ひ出しすればいゝんだ。

が、私にはそれが云ひ出せなかつた。それを云ひ出させないのが、小夜子の顏附や態度に見てとられたからである。

小夜子は、すつかり憂鬱になつてゐる。それは、唯、父を失つた爲めばかりではないらしい。その悲しげな眼眸には、私に見られる事を憚るやうな表情さへ見える。

嘉市がゐるのだ。嘉市といふ者の存在が、重石となつて彼女の心にのしかゝつてゐるのだ。

いや、その重石は、私の心にものしかゝつてゐるのだ。

それはもう、その年の暮れに近いある夜の事であつた。私は小夜子の家をたづねた。震災以來、がつたりと老い込んでしまつたお榮さんは、風邪氣だとかで寢込んでゐるので、私と小夜子とは、手持無沙汰な沈默のうちに相對してゐた。板壁の隙間から、こほろぎが沁み入るやうな聲で鳴いてゐた。

「私ね、お話し度い事があるんですけど——。」

見あげた眼をすぐに低く落し、膝の上で掌を擬りあはせるやうにしながら、小夜子は云つた。

「僕も、——僕もお話し度い事があるんですよ。」

小夜子は、又、ちらと私に眼をあげた。その眼はすぐに伏せられた。

肩が深い溜息で搖れるやうに見えた。

「私、明日、おうかゞひ致しますわ。おうかがひしてもよろしう御座いませうか。」

「どうぞ。」

と私は云つた。

あくる日、私は小夜子の來訪を、朝のうちから待つてゐた。小夜子の話し度いといふ事――それが對嘉市の問題である事は明かであつた。私は、それに觸れるのを恐れる心から、小夜子に對して、嘉市について語る事を避けてゐた。小夜子も私に嘉市について語つたことは無い。しかし、嘉市が時々小夜子を訪ねてゐるらしい事は私にも判つてゐた。

小夜子の來訪を待ちながら、私は、しきりに自問自答した。

嘉市が何だ？　何故、お前はそんなに嘉市を憚るのか？　小夜子の心が、嘉市になくして、自分にある事は明らかでは無いか？

いや、さうばかりは云へない。小夜子の心が全く嘉市に動かないとは云ひきれない。あの時、九死一生の際に、小夜子一家を救つた嘉市。その嘉市に對する感謝、感謝に裏附けられた愛――それが、小夜子の心に動いてゐない筈は無い。

しかし、それは嘉市にとつて偶然のチャンスだつたのだ。偶然のチャンスをつかまへて、嘉市

は有利の地位を占め得ただけの事だ。恩に對する感謝と、愛とは全然別物でなければならない。一體、お前は、最初から嘉市を憚り過ぎてゐる。嘉市など、無視して、大膽に、お前の愛を告白するがいゝのだ。

待て。嘉市は命がけで火の中に飛び込んだのだ。その嘉市の行爲を、單に偶然のチャンスをつかまへたといふ一語だけで説明出來るか。しかも、深仇たる彌右衛門爺さんを、嘉市は助けたのだ。それほど、嘉市は小夜子を愛してゐるのだ。

嘉市は小夜子を愛してゐる。しかし、自分だつて此の樣に小夜子を愛してゐるのだ。他への斟酌が要るものか。お前はあまりに遠慮に過ぎる、氣が弱過ぎる、嘉市が何者だ！　嘉市など蹣みにじつてしまへ！

何の結論にも決心にも導かぬはてもない自問自答は、いたづらに私の心を疲らせるばかりであつた。そのうち、日暮近くなり、小夜子はたづねて來た。

「あの私――」

と、小夜子は座が定まるや否、かう云つた。

「矢張、決心致しましたの。」

「矢張？　決心とは――？」
「私、あの人と結婚しようと思ひます。」
「嘉市君と――？」
平靜を裝ふ事は出來なかつた。私は自分の聲でないやうな聲で云つた。
「はあ。」
「嘉市君から申込まれたのですか？」
「いゝえ。あの人は何にも云ひません。だから、私、餘計に辛いんですの。」
「あなたは嘉市君を愛してゐるんですか？」
「……」
「たすけられた恩は恩です。人間は、自分の本心に對して正直でなけりやならないと僕は思ひます。」
「前から――ずつと前から、あの人は苦しんでゐました。私、もうあの人の顏を見るのが辛くて――。」
「それは僕にはわからないわけは無かつたんです。しかし、愛と憫みとは違ふ――。」

「憫みなんて、そんな氣持を、私、あの人には持つてゐませんわ。私、唯、ありがたいと思つてゐるだけなんです。」
「感謝と愛とも違ひますよ。」
「あの人を愛してゐるかと云はれゝば、私、何とお返事すればいゝかわかりません。でも、結婚といふものは愛の爲めにばかりするものでせうか？」
「愛の無い結婚は不幸だ、あまり平凡な云い草ですが――。」
「不幸でも何でも仕方が無いと思ふんですの。矢張、それが私の運命だつて氣がするんですの。」
「運命――すぐにさういふ言葉を持ち出す。それが第一間違つてゐるんです。」
私は、少し急き込んで云つた。
小夜子は、膝に眼を落して、しばらく思ひ沈んでゐたが、
「あの人、亡くなつた私の父に、深い恨みがあるのだと云つてゐましたけど――。」
「それを、嘉市君、あなたに云ひましたか。」
「えゝ。親の仇とも思つてゐた――さう云ひました。そして、それなのに、自分は斯うして御

機嫌取りにやつて來る。自分のやうな意氣地無しは無い。自分のやうな大馬鹿者は無い――さう云つて涙を流してゐました。」

「うむ。」

「私は何も知りません。どんな事があつたんでせう？」

「然うですか？　そんな事を云つてゐましたか？」

「あの人のお父様は、自殺なすつたつて事ですわね。母から一寸きゝましたけど――。」

「嘉市君のおやぢさんは、池の端の小作人でした。――或事からひどくあなたのお父さんを恨んで、首をくゝつて死んだとか云ふ事です。」

「まあ！」

小夜子の顏は青ざめた。

「それなのに――。」

と、長い間を置いてから小夜子は云つた。

「あの人は、父をたすけて下すつたんですわ。私、矢張、あの人と結婚しなければなりません。此上、あの人を苦しめてはいけないと思ひます。」

「然うお考へになりますか？」

「えゝ。私、それより外に仕方が無いと思ひます。あの人が、父や私共を助けた事を恩に着せて、それを枷に私を求めるといふのでしたら、私も、思ひ切つてはねつけられたかも知れません。でも、あの人、さうぢやあ無いんです。あの人は、私には何一言仰有いません。そして、一人で苦んでいらつしやる。それを見ると私もう辛くて辛くて――。」

又、小夜子は低くうなだれた。涙がぱらりと膝に散つた。

「あなたの氣持はよく判りますよ。併し、小夜子さん、あなたに就いては僕もいろ〳〵と考へてゐました。小夜子さん、僕もあなたを――。」

絶壁を攀づる者のやうに、苦しく喘ぎながら、私がしどろもどろに云ひかけたのを、小夜子は慌てゝとめた。

「どうぞ、もう何も仰有らないで下さいまし。邦夫さんのお心持は私にもよくわかつてゐるつもりでございます。それを仰有られると、私の折角の決心もぐらついてしまひさうです。いゝえ、私は一層辛くなるばかりでございます。」

涙のたまつた眼を大きくみはり、まともに私の顏を見つめながら、顫えを帶びた、そして少

しかすれた聲で小夜子は靜かに斯う云つた。

悲しいと云へば、此の位悲しい顏は無かつた。が、その悲みの底には、何か犯し難い嚴かなものが籠められてゐた。

かういふ小夜子に對して、私が何を云ひ得たらう！　小夜子の苦しみは決して愛慾の苦しみでは無い。愛慾以上の何ものかの――謂つて見れば、良心の苦みなのだ。

さう言葉に出しては云はなかつたが、小夜子は、父の彌右衞門が嘉市から奪つたものを、その身を以て償はうとしてゐるのだ。それを償ふ事を、自分に課せられた義務だと考へてゐるのだ。

「然うですか？　あなたが然うお考へになるならば、然うなさる外無いと僕も思ひます。嘉市君の氣持には、僕だつて十分同情出來るものですから――。」

私は斯う云つた。

「邦男さん、わたしはあなたが兄さんのやうに思へてなりません。どうぞ、妹だと思つて、お見捨てなく――。」

小夜子の言葉は中途でとぎれた。うなだれた顏に手巾をあてゝ小夜子は激しくすゝり泣きを

はじめた。

その年もおしつまつてから、小夜子は嘉市と結婚した。この結婚にあくまでも不同意なお榮さんを、私の口で說きつけなければならなかつた。もし二人の間は切つても切れぬものになつてゐる――私は、お榮さんに對して、そんな虛言まで吐いて見せなければならなかつた。

「何て事だらう。あの嘉市と夫婦になるなんて――嘉市は、邦男さん、あなたも御存じの筈だ。あれは、うちの小作人の子ですよ。喰ふや喰はずの水呑百姓の子ですよ。あの人の親父の嘉助なんぞは、うちの土間の隅にかゞんでゐた人間ですよ。」

お榮は斯う云つて、腹を立て、そして泣いた。

「しかし、それは昔の事です。今は、おばさん、そんな舊い時分の事にこだはつてゐる時ぢやあ無い。嘉市君は、あの大きな工場の職工長になつてゐるんです。職工といふとひどく下等な仕事のやうにお考へになる、そのおばさんの考へが第一間違つてゐますよ。それに、嘉市君は僕の目から見ても實に立派な青年です。」

「何の立派な青年でせう。あの男は、あの震災の時に助けてくれたのを恩に着せて、無理矢理にあの子を口説いたのですよ。あの娘が又、馬鹿律義なものだから——。いゝえ、あの娘は馬鹿ですよ。人もあらうに、あの嘉市なんどと、あの首くゝりの嘉助の子なんどと——。あんな男と結婚する位なら藝者にでもなつてくれた方がどんなにいゝかわからない。いいえ、邦男さん、あんたが何と仰有らうと私は不承知です。邦男さん、あんたもあんたぢやありませんか。私、實は、あの娘はあんたが貰つて下さる事だとばかり思つてゐました。さうなつたら、どんなに嬉しいだらうと、私はそれを樂みにしてゐたのに——。」

あの娘だつてあなたのところへ嫁く氣でゐたのだ。それがこんな事になつたのに、あなたが冷淡だからだ——と、お榮は、私にまでさん〳〵恨みを云つた揚句、

「いゝえ、どうせ、そんな裏長屋育ちのあの娘はあんたにはお氣に入らなかつたかも知れませんがね。」

と、鋭い皮肉で私の胸を突きさしたりした。

しかし、お榮の不承知も、結局どうにもならなかつた。それにお榮も、その不承知を貫きとほすには、もうあまり弱り過ぎてゐた。その頃、お榮は殆ど病床に就ききりといふ狀態だつたのである。

憂愁の人

小夜子と嘉市との結婚は、何よりも郷里の人々を驚かした。

浚落したとは云へ、池の端は、由緒正しい舊家である。その家の娘と生れた者が、小作の水呑百姓の倅と結婚するとは何事であらう。しかも、嘉市の父は、あの井上家の庭前で縊れ死んだ男では無いか。

あの小夜子といふ娘は、矢張後家入のお榮の子だ。お榮も小作百姓の娘なのだから、その腹から出た小夜子といふ娘には、井上家の令嬢としての誇りなぞはまるで無いのであらう。

あの娘だけは殘つたと思つたが、あの娘が嘉助の倅の女房になるやうぢや、池の端も矢張おしまひだ。

池の端の昔を知る者はかう云つて嘆息した。

「さうか。さういふ事になつたのか？」

と、私の父は云つた。私がどんなに平靜を裝うてゐても、父の眼には、私の苦しみが映じてゐたに違ひ無い。

「だが、あの娘がよく承知したものだな。――地震の時に彌右衞門爺さんを助けて貰つた恩誼の爲めにといふのか、うむ。」

と父はしばらく考へてゐたが、

「どうも、へんな事になつたものだと思ふが、しかし、まあ、これで何も彼も帳消しになつたわけだな。」

「さうですよ。僕もそれを考へました。」

嘉助の死、それによつて嘉市が井上家に絡んでゐた恨みも、これで全く消えたのだ。

私自身の苦痛を措いて、第三者として靜かに考へて見れば、これが矢張尤も自然な解決なのだ。

地主と小作人と、階級的に峻別するのは田舍にゐての考へ方だ。

さういふ對立も、もう解消された。

二人が夫婦になつたのは、矢張いゝ事だつた、と私は思つた。

私は二人の結婚を肯定した。理性ではそれを肯定したが、しかし、失戀者としての私の苦痛は堪え難いものだつた。

いつまで經つても益々募つて行くばかりのその苦痛からのがれる爲めには、一つきり方法が無かつた。

私が結婚したのは、小夜子が結婚してから半年ばかりの後である。文壇の先輩の娘で、さう深く知つたといふのでもない女を、まるで戀愛ぬきの、平凡な、そして無造作な結婚をしたのであつた。

いはゞ、疼きやまぬ心の、鎭痛劑としての結婚に過ぎなかつたが、妻の波子は、案外良き妻であつた。私の結婚生活は思ひの外に順調であり、平安であつた。

その結婚生活の中で、私の心は藝術に嚮つて行つた。私はひたすらに書いた。

そして、私は次第に苦痛から解放されて行つた。

とはいへ、まだ私は、小夜子を見に行くだけの勇氣は持ち得無かつた。嘉市の妻となつた小夜子に、平かな心で相對し得るだけの自信はまだ無かつた。

小夜子からも何の消息も無かつた。同じ東京に住みながら、私は、小夜子を千里の遠きに置

いた。

突然、嘉市からハガキが來たのは、小夜子が結婚してから丁度一年たつた頃であつた。

それは、出產の通知だつた。小夜子が男の子を生んだ、母子共に健全、他事ながら御安心下されど度くといふ、嘉市の手蹟で書かれたハガキを讀むと、何事ぞ、私の心は云ひ甲斐もなくも搖れ騷いだ。

もう生んだのか、あの嘉市の子を！

私は何か腹立たしい氣持がした。そのハガキの裏に嘉市の勝ち誇つた顏が見えるやうにさへ思はれた。

私は祝ひ物を持たせて妻を小夜子の許にやつた。何も知らぬ妻の波子は、その使から歸つてくると、

「きれいな方ねえ。」

と無邪氣に感嘆の色を見せ、

「立派なおくさんですわ。職工なんかの奧さんには本當に勿體無いわ。」

「職工ッて云つても、職工長となればえらいもんだよ。おれなんかよりも收入も多いだらうしね。」

「さうね。おうちなんかも思ひの外立派だつたわ。」

「さうか。」

と、私は呻くが如く答へた。若し、小夜子さんがみじめな不幸な毎日を過してゐるときいたら、私の心は激しく痛んだかも知れない。しかし、小夜子が、現在の境遇に滿足しきつてゐると想像する事も、私にとつては矢張苦痛だつた。自分でもわけのわからない、此の矛盾——。

私は矢張小夜子を忘れて了ふ事が出來ずに居たのだ。

一年あまりも會はずにゐた小夜子を偶然の機會が私の前につれて來たのは、それから又三月ほど經つてからであつた。

秋も終りのある日、私は、銀座のある喫茶店の廣間の片隅で、つめたい雨の雨脚の窓に亂れるのを眺めてゐた。

その時、小夜子がはひつて來たのだ。私はかなり强度の近視ではあるし、灯の入る前の雨の日は、窓際とはいへ薄暗かつたので、

「山岡さん。」

と近寄つて聲をかけられるまでは、私は、それが小夜子であるとは氣がつかなかつた。

「やあ。」

私は思はず椅子からはじきあげられた。私の狼狽にも拘らず、小夜子は例の落着いた調子で、

「しばらくでございましたわね。あのいつぞやは、わざ〳〵奥様がいらしつて下すつて、その節は――。」

子供の祝ひへの禮を云つた。

「お目度度う御座いました。大へん、御安産だつたさうで――。」

「はあ、おかげさまで――。」

小夜子は、いくらか頰を赤らめたが、産後の窶れが眼についた。すつきりと痩せたその姿を眺めながら私は、「冷艶素香」といふ形容詞を思ひ浮べた。

「もう、すつかりいいんですか？」

「はい。でも、髪がこんなにぬけて――。」

と、小夜子は、ぐるぐる卷きにした髪に一寸手をやつて見せて、

「すつかり、おばあさんになつてしまひましたでせう。」

口元に浮べた靜かな微笑も、私には馴染の深いものであつた。

「男のお子さんだつたさうですね。」

「はい。」

小夜子は、顎を襟にさし入れるやうにうつむいたが、

「一度、おたづねしようと思ひながら、つい――」

「いや。僕の方こそ――。お祝ひには自分でうかがはなければならないと思ひながら、忙がしさにとりまぎれて――」

「お忙しいんでございませうね。お書きになつたもの、拜見して居りますわ。」

「嘉市君は御元氣でせうね。」

「はい。」

重い返事だつた。

「お母さんは？」

「母は、此頃すつかり弱つてしまひまして――いゝえ、これと云つて悪いところも無いやうでございますけど――」

「そりやいけませんね。——まあ、おかけになつたら——」

私は椅子をすゝめたが、小夜子はかけようとはしなかつた。卓を斜めにはさんで立つた小夜子の、その伏目勝の顔は濃い憂愁のベエルにつつまれてゐるやうに見えた。それが私の思做しであるにしても、少なくともそれは幸福なる者の姿では無かつた。

「赤ちやんは？」

私は長い間を置いてから訊いた。

「今日は置いてまゐりました。」

さう小夜子が答へた時、扉を排してはいつて來たのは、背廣姿の嘉市だつた。廣間の中を物色した嘉市の眼は、すばやく小夜子をすくひあげ、つゞいて、私に向けられた。瞬間、その眼はきらりときらめいたやうに見えた。

「邦夫さんしばらくでした。」

つか〳〵と歩み寄つて來た嘉市は、他の客達をびつくりさせるほどの大聲で斯う私に挨拶した。つゞいて、私に、祝ひ物の禮を云ふと、

「小夜子。大分待つたか？」

「いゝえ、今、來たばかりよ。」

多分買物か何かの爲めに嘉市の工場からの歸りを小夜子はこゝで待合せる約束になつてゐたらしい。「小夜子。」と呼んだ嘉市の、威壓的な言葉に私は強い反撥を感じたが、嘉市は夫小夜子は妻なのだ。さう呼ぶのはあたりまへの事ではないか。

「いづれ又。小夜子、お茶でものんで行かうか。」

「失禮いたしました。では——。」

小夜子は、嘉市に引き立てられるやうにして別の卓に移つて行つた。

私はすぐにそこから飛び出した。

私は、冷たく降る雨の中を、愚かな己の心を叱りつけながら歩いた。

私はその頃、郊外の方に家をもつてゐた。

ぱつとせぬ存在ながらも、私は、ともかくも一個の作家として認められ、それで生活が出來るやうになつてゐた。

私の父は、求めるところ少なき寛大さを以て私の生活を眺めてゐて呉れた。私にとつて、何よりなるよろこびは、私が勝手に結婚した妻の波子が、父にも母にも氣に入つて貰へたといふ事だつた。

父も母も、時々は、私の家を見舞つて呉れた。

小夜子の母のお榮が亡くなつた、といふ事をも、私は父の口からきいた。

「さうかい？　ぢや、お前のところへは何のしらせも無かつたんだな。」

「ええ、僕は些とも知りませんでした。何しろ、小夜子さんの結婚以來、まるで交渉が無いんですからね。――いや、小夜子さんの子供が生れた時には通知がありましたがね。」

「どうも、あの、嘉市といふ男は少しへんくつらしい。あの娘も、なか〳〵骨が折れるといふ事だ。」

父は考へ深い調子で云つた。

「骨が折れるつて、どんな風なんです。夫婦仲がうまく行かないとでもいふんでせうか。」

「夫婦仲はともかくも、お榮さんと嘉市との間がうまく行かないで、仲に立つてあの娘が困つてゐたといふ事だつたよ。」

「さうかも知れませんね。小夜子さんの結婚には、お榮さんといふ人、最初から反對だつたんですから。」

「お榮さんにしちや、無理もないが、一旦婿にした以上、何と云つて見たところではじまら無え。そのあきらめがつかねえところが矢張女だ。――だが、そのお榮さんが死んで、あの娘も、まあ、いくらか樂になつたらうさ。」

父は、例の淡々たる調子だつたが、

「しかし、あの小夜子さんといふ娘も、思へば氣の毒なものさ。」

といふ言葉には溜息がまじつてゐた。

「しかし、嘉市君は小夜子さんを隨分大事にしてゐるんでせう。」

「そりやまあ、然うだらうが、嘉市もすらツと育つた人間ぢや無えからな。――お前が小夜子さんの家へ顏出しをし無え事はいゝ事だ。」

何にも見ない風をしてゐながら何をでゐ見てゐる。私は父の鋭い眼を長れた。

さうだ。小夜子と自分との間には、もう何のつながりもないのだ。小夜子についてすこしでも思ひを煩はすのは愚かな事だ。彼女は彼女として生きるがいゝ。小夜子がどうしようと、そ

れが自分に何の關係があらう。

私は、小夜子を關心の外に置く可く努めた。

それから又一年が徑つた。私の念頭から、小夜子の事は殆ど拂拭しつくされた。——そして私も亦、父といふものになつてゐた。その小さい一塊肉の、しみ〳〵と肌に沁み入る暖か味は、私に新しい感覺をもたらし、その新しい感覺の中に、新しい感情——父としての感情が眼覺めた。この感情は不思議なものであつた。それは思ひがけないよろこびであつたが、よろこびばかりのものではなかつた。よろこびと云ふ可くは、あまりに嚴肅な氣持——自分といふものゝ存在が、此の人生の永遠の生命としつかりと結びつけられたといふ事をはつきりと意識し、そして、此の人生の前に畏み虔まずにはゐられないやうな氣持。いつて見れば、まあ、さう云つたやうなことであつた。父や母のよろこびは、私にも增して大きかつた。

「男の子とは手柄だつたぞ。波子。」

と、父は波子を賞めそやして、

「どうかいゝ子に育てて呉れろよ。これで、山岡の家は萬々歲だ。ちん、宜かつた。宜かつた。男の子とは大手柄だ。御先祖樣もおよろこびなさるだらう。私も、これで大安心、大安心！」

父は相格を崩して云つた。

此の父のよろこびの中に、私は「家」といふものを感じた。「家」といふものに對する自覺が父となつて、はじめて私の心に、はつきりとかたちづけられた。私は、自分の腕に自分の子を抱いて見た、あの小夜子の懷に抱かれてゐる子供のことを思ひ出した。

池の端の家も、矢張斯うして續いてゐるのだ。部落の誇りだつた舊家井上家は、部落の人々からも、もう完全に忘れられてゐるかも知れない。しかし、井上家は、儼として存在してゐるのだ。此の都會の片隅に埋もれながら、あの舊家の血は、新しい生命となつて咲き出してゐるのだ。

それから又、半年ばかり經つたある日の事だつた。私が外出先から歸つて來ると、

「今日、珍らしいお客樣がお見えになりましたよ。」

波子は、私の顏を見るなり云つた。

「何人？」

「あの、そら、郷里の方だといふ、あの、私がいつかお脱ひを持つて参つた日暮里のあのきれいな奥さん。」

「小夜子さんが來たのか？　一人で――？」

「赤ちやんを抱いて――。何かあなたに御用があるらしい様子だつたけど、留守だと云ふと、ちや、又うかゞひますつて、たつた今よ、たつた今お歸りになつたわ。」

波子は早口にかう告げた。

受難者

小夜子がたづねて來たのは、何か用事があつての事であらうが、一體、何の用事なのか？

私は、何か氣にかゝりながら、再びたづねて來るのを、心待ちに待つてゐたが、小夜子はそれきり訪ねて來なかつた。

小夜子から、手紙が來たのは、それから一月あまり經つてからであつた。

（今更、こんな事を申上げられる筈のものではございませんが、この頃思案にあまる事があり

是非相談にのつて頂き度いと思ふのでございます。いつぞやおたづね申しました時は、生憎に留守で、御留守と承ると、却てそれがよかつたやうにも思ひ直され、決してお耳に入れまいと、それから今日まで控へ控へして居りましたけれど、矢張あなたのお力にすがるより外無いと思ひますので、此の手紙さしあげます。御都合のよろしき日をお知らせ下さらば、いつにても參上致しますから――）云々といふ手紙であつた。

私が返事してやつたその日のその時間に、小夜子はたづねて來た。

むつかる子を膝にあやしながら、

「私、あなたを兄さんだと思つて――こんな事申しあげちや御迷惑かも知れませんけど、本當に然う思つて申上げるんですの。」

さう前置して、

「嘉市の事で御座いますの。嘉市が此頃へんなんでございますのよ。」

「へんだといふと？」

「あの人、人は好いんですけど、一寸ひねくれたところが御座いましてね。時々、へんな事を云ひ出して私を困らせたんですけど――」

「どんな事を云ふんです？」

「お前は、おれと結婚した事を後悔してゐるだらう、お前は義理に搦らまれておれと結婚したのだらう、お前はもつと自分自身に對して正直でなけりやいけなかつたのつて――」

小夜子は私の顏を見無いやうにして云つた。

「ふうん、そんな事を云ふんですか。」

「で、私、かう云つてやりました。義理に搦まれてと仰有られゝば、そんなところが無かつたとは云へません。しかし、私は決して後悔などはして居りません。私は、あなたのいゝ妻にならうとして、斯うして一生懸命にやつてゐるぢやありませんか。さう云ひますと、その一生懸命がおれには氣が喰はないんだなんて、まるで無茶な事ばかり申しますんですもの。」

「うむ。」

「たとへ、義理で結婚しようとも、斯うして坊やまで生れてゐるぢやありませんか。子供まで出來た仲で――あなたは女心といふものを御存じないのですか、つて、私斯う云つてやりますと、そんな子供なんか生んで貰ひ度か無かつたなんて――。」

小夜子は淋しい笑ひを浮べて云つた。

「無茶ですね。」

「お前はおれを愛しちやゐないだらうが、おれだつてお前を些とも愛しちやゐなかつた。お前と結婚したのは唯意地を通しただけの事だ。――そんな事も申しますの。」

「大嘘吐きだ。それはまるきり反對ですよ。意地を通して、ぢや無い。意地を捨てて嘉市君はあなたと結婚したんぢやありませんか。」

「さうかと思ふと、又、こんな事を申しますの。お前は逃げ出す氣でゐるかも知れ無いが、決して逃がしやしないぞ。お前は知るまいが、お前の親父はおれの敵だ。おれはお前と結婚したのはその復讐をしてやる爲めだつたなんて。」

「そんな事まで云ふんですか。」

「それは御酒の上の言葉で、本氣に云つたんぢや無いとは思ひますけど――私も、つい、矢張、そんな氣だつたのかと思つたりして、眞暗な氣持になりますの。」

その結婚によつて、すべてが解決してゐたと思つてゐたのは間違ひであつた。悲劇はまだ續いて居るのである。私は撫然として、惱みにやつれた小夜子の顏を見上げた。

「そんなひがみから出た事なんですの。こんなにひがませて了つたのは矢張私のやり方に何處

かいけないところがあつたのかも知れません。しかし、私としては本當に一生懸命になつてゐるつもりなので御座います。あの人は、私の愛を僞りだと云ふんですけど、私、本當に心からあの人を愛してゐるつもりなんでございます。」

小夜子は心持顏を赤らめて云つた。

「さうですとも、僕だつてそれを疑ひはしません、どうも、嘉市君といふ人は困つた人だなあ。」

「でも、今日はこんな事をお話にうかゞつたんぢや御座いません。ひがみも嗔嘩も、うち〳〵の事なら宜う御座いますけど、あの人、此頃惡い仲間が出來ましてね。」

「何か道樂でもはじめたんですか？」

「いゝえ、それなら宜う御座いますけど、何か、會社に對したくらんで居る樣子なんで御座います。どうも、此頃流行の惡い思想にかぶれたらしいんで御座います。」

「さうですか？　うむ。」

「私が、どうぞそんな方に行かないで下さいと申しますと、お前なんか裏長屋で育つたつて、身體の中にや矢張お嬢さんの血が流れてゐるんだ。地主を恨んで恨み死にした水呑百姓の子のこのおれの氣持なんかわかるもんか、と、斯う一語できめつけてしまひますもの。」

「うむ。」

「毎晩、仲間の人があつまつて來て、何かこそ〳〵と話し合つて、――私もう不安で、じつとしてゐられなくなつて――」

それで私に相談にやつて來たのだといふのだが、私にどうする事が出來たであらう。私が行つて忠告を加へたところで、私の言ふ言葉など受けつける嘉市とも思はれない。いや、嘉市は、私には想像もつかぬ位の激しい敵意――敵意だけならいゝが、妙な、性質の惡い疑惑を、私に對して持つてゐるかも知れないのだ。

「私、あの人にそんな傾向がある事は前から知つてゐました。だから私、生意氣なやうですけど、私の力で――まごころであの人をそんな間違つた方へ行かせ無いやうにしようと、一つはそれもあつて、あの人と結婚したんですけど、どうやら反對の結果になつて了つたらしい御座いますわ。」

「僕が、あの人に忠告する事も、矢張逆結果に了りさうですね。あなたの犧牲を以てしてさへその力が無かつたとすれば――。」

「本當に然うで御座いますわね。」

と、小夜子が案外あつさりとその頼みを徹回したところを見ると、それは小夜子にもわかつてゐるらしかつた。小夜子は唯、その苦衷を訴へる爲めにだけ、私を訪ねて來たらしかつた。

「しかし、まあ、あんまり心配なさらない方がいゝと思ひます。人間の眞ごゝろと云ふものはいつか通るものです。あなたが、そんなにまで嘉市君のことを思つて居るんですからね。あなたの心持が、よくわかりさへすれば、嘉市君も素直な人になるでせうし、間違つた考へもやがて捨てるだらうと思ひますよ。」

何といふ無力な、お座なりの言葉だ。さう云ひながら私は、自分に腹を立ててゐた。

「私も、然う思つて、そのつもりで一生懸命にやつて居るんですけど、どうかすると自信が無くなつて了つて——。」

小夜子は又淋しく笑つて、

「矢張、私に足り無いものがあるんですね。私、こんな子供まで出來ながら——」

と、やうやく、すや〳〵と眠り入つた膝の子の顏に眼を落しながら、

「私、矢張、時々、へんな夢をでも見てゐるんぢや無いかといふ氣が致します。」

私は何と云つていゝか判らない。

「でも、そんな心持になる事がいけないので御座いますわね。あの人が、私を信じて呉れないのも、あの人としちや無理も無い事かとも思はれます。」

「だが、嘉市君も餘りわからずや過ぎる。」

「さう思つて、口惜しくなるんですけど——。」

小夜子は併し、涙など見せはしなかつた。言葉の調子さへ飽迄も靜かであつた。

「つまらない事をお聞かせして——。でも、聞いて頂いて何となく氣持が樂になりました。」

「今のところ、僕は何にもしてあげられませんが、併し、いざといふ時には、出來るだけの事はするつもりです。遠慮なく仰有つて下さい。」

「お願ひ致します。本當に、私、外に何人も居ないんでございますから——」

小夜子はさう云つて歸つて行つた。

自分が嘉市に働きかける事は、却て逆效果を來す事になる。といつて、此の場合、手をつかねて傍觀してゐて宜いだらうか？

矢張、嘉市に會ひ、先づ誠心を披瀝して、嘉市に、そのへんな疑惑の全く根の無いものにある事を說き、その階級的偏見によつて釀成された爭鬪的な意識を拂ひ去るやうに忠告する事は自分に課せられた役目では無からうか？

然うは思ひながらも、私には敢てそれをするだけの勇氣が無かつた。

私は唯、小夜子が身を以てそれを解決しようとしたにも拘らず、その小夜子の、愛情以上の精神的な努力も、遂に嘉市の偏執を動かす事が出來ないといふ事實の前に嘆息する外は無かつた。

それにしても、傷ましいのは小夜子である。

小夜子はそれきり又手紙一通よこさなくなつたが、小夜子はどうしてゐるか？

外ながらにでも樣子を見度いと私が小夜子の家のあたりに出掛けて行つたのは、それから又、二月ばかりの後、春のはじめの、生あたたかい風が、埃をあげて騷々しく吹くある黃昏の事であつた。

日暮里のごみ〳〵した町の中の、二階建の新築の二階家は、さうみすぼらしい構へでは無かつた。二階の障子に灯の影も映つて居らず、家內に人も無いやうにひつそりとしづまつてゐた。

私は、門の前に立つてゐた。嘉市はまだ歸らぬと見える。留守に訪ねたりしては、餘計嘉市の疑惑を逞しくさせる事になる。私は、門をはいつて行く決心がつかなかつた。

そのうちに、門の中からけたゝましい子供の泣聲が起つた。

「お目々がさめたの。坊や！」

飛んで行つて抱きあげたらしい氣配がすると、

「いゝ子。いゝ子。」

あやす聲がして、つづいて、子守唄の聲がきこえて來た。私は、我知らずその歌に耳をとられてゐた。

（ねんねんよう、おころりよう、
坊やはよい子だ、ねんねしな――。）

それは、ありきたりの子守唄だつた。が、その平凡な歌の、單調な曲節の上に、何といふ深い哀感が籠つてゐる事であらう。子守唄といふものは、一體、さうしたものなのだが、その正しく小夜子の聲に違ひ無いその子守唄の聲ほど、かなしく胸にしみるものを私は曾てきいたことが無かつた。しかしその哀調の中には、何か凜と張つたひびきがあつて、苦惱の中に、その

とし子をまもる健氣な母の思ひも、はつきりとそこに聞きとれるやうな氣がしたのは、私の思ひ做しであつたらうか？

私は、その日とう〳〵門を潜らずに歸つた。

小夜子の事を思つて、眠られぬやうな夜もあつた。こんな事になるのだつたら、何故、押しきつて小夜子と結婚して了はなかつたのだ。つまらない遠慮から、小夜子をとう〳〵此の不幸に追ひ込んでしまつたのだと、悔まれる事もあつたが、併し、それは今更あまりに愚かしい愚痴に過ぎない。私には、既に妻もあれば、子供さへあるのだ。

波子と云へば時々小夜子の事を語り出した。

「あの八木さんの奥さん、どうしていらつしやるんでせうね。」

何のきつかけもなしに、ふと、波子が云ひ出す時に、いつも私の胸に小夜子の姿が浮んでゐる時なのも不思議だつた。波子は鷹揚に、物を疑ふ事などのあまり無い女なのだが、小夜子の來訪はそんな波子の心にさへある影を落してゐたのだと氣がつくと、私は、人の心といふものほど厄介なものは無いと思はずにはゐられ無かつた。

さうして又半年が過きた。或る日の新聞記事が、電光のやうに私の眼を打つた。海の彼方か

らこの頃盛んな勢で押寄せて來た或る種の思想に誤まれて、間違つた行動をとらうとした一團が檢擧されたといふ記事の中には、八木嘉市といふ名も、はつきりと刷り出されてゐた。

とう〳〵來る可きものが來たのだ——。

私は、その新聞記事を睨みつけて、胸の底から深い呻きを擧げた。かうなれば、もう拋つては置けなかつた。私は早速、小夜子の家に出かけて行つた。小夜子は案外落付いてゐた。

「いづれ、こんな事になるだらうと思つてゐましたの。いゝえ、斯うなつた方がいゝと私は思つて居ますの。」

靜かな調子で云つた。

「これを機會に、あの人は正しい道に引きかへして呉れるかも知れませんから。却て宜かつたとさへ思つてゐます。」

小夜子の云ふところによると、嘉市は、もう三月も前に、會社の方もやめて、毎日出歩いてばかりゐた。生活の方はまるでかへりみないので、小夜子自身の内職で、どうやらその日を過してゐたといふ事で、なるほど、その荒涼とした座敷の隅には、それだけが華やかな色彩を放つて、賃仕事らしい縫物がひろげられてゐた。

「でも、大分深入りをしてゐたやうですから、容易にはかへして頂け無いだらうと思ひます。十年でも、廿年でも、私は待つて居ますから、あなたも身體を大切にして、そして、正しい道を踏める人になつて歸つて下さいまし――。出て行く時に斯うあの人に云つたんでございますが――」

小夜子は、そこで言葉をきり、泣き笑ひに似た表情を浮べて、

「そんな事があてになるもんか？　と、皮肉に笑つてましたけど――」

「うむ。」

「でも、私、やつか考へ直して呉れる時が屹度來ると思ひます。いいえ、あの人はどうでも、私には、子供があるんでございますもの。子供だけは、しつかりした人間に育て上げ度いと思つてゐます。」

小夜子の顏には、强い決心の色が嚴かに描き出されてゐた。

母

嘉市がゆるされて歸つて來たのは、それから一年ばかり經つてからであつたが、彼の骨髓にまで滲み込んで了つた彼の思想は、彼をして正しい道に歸らしめなかつた。監視の眼を偷んで、再び暗躍をはじめた彼が、二度目の檢擧を前にして行衞をくらましたのは、それから又一年ばかり經つてからであつた。その頃の言葉で云へば、彼は、「もぐつた」のである。

「駄目ですわ。あの人――。私はもうあの人の事を思ひ切りました。私は、あの人の歸りを待つてようと思ひます。」

たうとは思ひません。私は、たゞ此の子の爲めにいゝ母になり、この子だけは立派な人間に育

小夜子は、その時、既に四つになつてゐた子――英吉といふその子を膝に抱いて、さう云つた。――嘉市の留守中は、仕立物の內職をして自活してゐたし、嘉市が戻つて來ても、嘉市には職業もなく、一向、生活の支柱にはなつてくれなかつたので、矢張その仕事を續けてゐた小夜子は、さうした生活苦との戰ひの中に、雄々しい意志を鍛へあげられてゐた。小夜子は笑ひもしないかはり、泣きもしなかつた。青白い頰は、强い決意を以て磨ぎすまされてゐた。

私は、時々、小夜子を訪ねた。女手に子供をかゝへての、その苦しい生活が見る目にも辛く、私の、餘裕のある限り物質的な補助をもした。

「だつて、そんなに度々――」

小夜子が、いかにも心苦しさにするのを見ると、私は云つた。

「兄妹のつもりでゐて呉れるなら、何も遠慮する事は無いでせう。はじめから、さういふ約束だつた。あなたは、僕を兄貴だと思つてゐて呉れた筈ぢや無いですか。」

「さうね。ぢや、いたゞくわ。――でも、あなたも、飛んでもない妹をお持ちになつたわね。」

「本當だ。」

と、私は、わざとおどけた調子で云つた。

「厄介な妹をもつた、僕も本當に災難だ。は、は！」

「すみません。」

小夜子は、うるんだ眼を私に向け、さう云つてから低く頭を垂れるのである。

私がたづねて行くと、小夜子はいつも嬉しさうだつた。時によると、浮々とはしやいで、此の人に似氣無い輕い調子のおしやべりをして見せる事などもあつたが――、そして、そんな時に私も明るい氣持になるのだつたが、どうかすると、お互ひにひどく氣が重くなり、沈默のうちに對座してゐる一刻一刻に、鬱息の息くるしさを感じるやうな事があつた。いや、さういふ

時の方が多かつた。

「奥さま、御機嫌いかゞですの。」

「相變らずですよ。」

「此間、お目にかゝつた時は、大分お肥りになつたやうですわね。」

「あいつは呑氣ですからね。」

「御幸福だからよ。」

「さうでもない。」

事實、妻の波子も、然う幸福でもなく、又、必ずしも然う呑氣なのでも無かつた。これは、小夜子の前にも決して云へぬ事なのだが、波子は、私がかうして小夜子を訪ねる事を、決して快くは思つてゐないのだ。露はに口にした事は無いが、波子の心にもある疑惑の芽が萠してゐるらしい。さうした神經質とは凡そ、緣の遠い、素直な女なのに――と、私は、人の心といふものゝむづかしさを考へて、いつも歎息するのであつた。

「さうでせうか？　私、あなたの奥様ぐらゐおしあはせな方は無いと思つてゐるのですけど。」

「何處へ行つたつて幸福な人などはありませんよ。」

「さうでせうか？」

「だが、小夜子さん、あなたはだん／＼痩せて來るばかりですねえ。——まるで、蠟燭見たいになつてしまつた。」

「本當！　此間御風呂で量つて見ましたらばね、十一貫と一寸しかありませんでしたわ。」

と、一寸頰に掌をあてて見て、

「おかしいわねえ。燃えもしないのに痩せるなんて。私ね——」

とつゞけかけた。小夜子は慌てゝ口を噤んだ。そこにしめ繩が張つてあるのだ。立入禁止の區域にまで會話をもつて行つてはならないと、小夜子も氣がついたに違ひ無い。

ぎゆ／＼と壁際に押しつけられたやうな、どうにも斯うにもならない心持——それを救つて呉れるものは、四つになる英吉の存在であつた。

もう片言で物を云ふやうになつた英吉は、「おぢちやん。」「おぢちやん。」と云つて私になつき、私ののばした腕の中に、毬のやうに飛び込んで來た。そして、しめつぽい柔かな手で私の顏を叩いたり、私の眼鏡を奪ひとつたりした。さうして、きやつ／＼と私に戯れてゐる英吉を、小夜子は、嬉しさうな、さうして悲しさうな眼で眺めて居た。

「いゝわね、英坊。英坊にはいゝ小父さんがあつて——英坊はしあはせね。」

「英坊はしあはせだ。いゝお母さんがあるんだものね。」

私の子供の洋一も三つになつてゐる。私は勿論洋一を愛してゐたが、洋一に對する愛も、英吉に對する愛も、私にとつては殆ど變りの無いものに思はれた。

「いまに、うちの洋一といゝお友だちになりますよ。」

「さうねえ。でも、あなたの坊ちやんといゝお友だちになれるやうないゝ子に育てなくては——私、いつもさう思つてゐるんです。」

「大丈夫、英坊はいゝ子になる。」

私は、英吉と洋一とが立派な、若者になり、手を執り合つて世の中に出て行く姿を想像した りした。

しかし、さうして、小夜子を見舞ふ事に就いて、私は、いつも後目痛さを感じずにはゐられなかつた。

その頃、小夜子は、矢張日暮里の、前に住んで居た家の近くに、間借の生活をしてゐたのだが、その家主の老婆の私を見る目にも何か氣になるものがあつた。いや、口さがない近所のお上さんたちなどの噂にも、耳を掩はずにはゐられ無いやうなものがあつたであらう。

「本當にうるさいんですよ。つまらぬ事ばかり云つて――」

小夜子はいらくか顔を赤めて云つた。

是非もない事だつた。子供と二人でくらしてゐる若い美しい女の許へ一人の男が訪ねて來る――何と疑はれても仕方が無いではないか。

「私は構やしませんわ。でも、世間ツていやなものですねえ。」

と小夜子はなげいて見せた。

私は、そんな噂は何とも思はなかつたが、しかし、やりきれないのは妻の波子の眼に、疑ひの色を見る事だつた。極く稀れに私の許に訪ねて來る小夜子へのあしらひにも何かぎこちないものを彼女は見せた。敏感な小夜子がそれに氣がつかないわけはない。

「斯うしていらしつて頂けるのは本當に嬉しいのですけど――。でも、あなたにいろ〳〵御迷惑をかけてゐるやうな氣がして――」

「何人が何う思はふと、お互ひの氣持に疾ましいところが無ければそれでいゝと思ひますがね。」

「それは然うですけれど――」

「つまらない事は氣にしない事にしませう。」

私は、輕く云つて退けたが、私の心は矢張重かつた。

私は、小夜子の兄のつもりでゐる。だが、私は果して兄の心になりきつてゐるだらうか。小夜子は、私の妹のつもりでゐる。だが、小夜子とても――。いや、小夜子は私の妹になりきつてゐるかも知れなかつたが、私は正直に白狀する。私の方は、全然兄の心になりきつてゐると、神樣の前に斷言するだけの勇氣は矢張無かつたのである。だから、波子の疑ひに腹を立てながらも、波子の疑ひを全く無稽のものとしてしりぞけ得る程の自信は私には無かつたのである。

小夜子を見舞ふ事を、出來るだけさしひかへなければならぬと私は思つた。私は次第に足を遠くした。途中で電車を乘び下りて、そのまゝ引き返した事も度々あつた。で、一月に一度が二月に一度になり、更に三月に一度になりといふ風に、訪問の度數は次第に減じて行つた。そ

れが苦しい自制を以ての疎遠であると、小夜子も察して呉れたのであらうか？

「隨分、長いことといらつして下さらなかつたわねえ。——でも、その方がいゝのよ。」

小夜子はさう云つて淋しく微笑するのであつた。

ある時、矢張三月目位に小夜子を訪ねると、小夜子は留守で、階下の老婆の話だと、數日前から英吉が工合が悪く、一昨日英吉を入院させ、小夜子はその附添ひに行つて居るといふ事であつた。英吉は痺弱い子で、よく熱を出したり、腹をこはしたりする——。入院したといふからは、餘程悪いに違ひ無い。私は、老婆に、その病院の名をきくと、早速そこへ飛んで行つた。露路の底にうづもれた小さい病院——病室も三つ四つしかないらしいその小さい病院の一室に、私は小夜子を見出した。英吉が小さい身體を横たへてゐる寢臺の、枕元の椅子に坐り、英吉の寢顔を見つめてゐる小夜子は、彼女自身が病人のやうに見えた。青ざめた顏に鬢の毛が亂れて、そつとはいつて居た私を見上げた眼も、熱を病む者のそれのやうにキラキラと光つてゐた。

「どんな工合です？」

ときくと、

「邦夫さん。此の子、助からないでせうか？」

いきなりから云つた小夜子の言葉に　訴へるやうな韻があり、詰るやうな韻があつた。

「そんなに悪いのですか？」

彼はさゝやくやうに云ひながら、病兒をのぞき込んだ。頸を細く痩せて了つた英吉は、不調和に大きく見える頭を枕に埋め、あるか無きかの呼吸を立てゝ眠つてゐた。耳の上に浮んだ靜脈が、ひくり〳〵と時々痙攣した。——なるほど、重態だ。

「大丈夫ですよ。病氣は一體何なのです？」

私は平氣を裝つて聞いた。

「氣管カタルから、とう〳〵肺炎になつてしまひましたの。」

「ふむ。で、醫者は何と云つてゐます。」

「今夜あたりが峠だらうと仰有います。」

小夜子は、全身の力をその眼にあつめて、じつと英吉の顏を見つめて居る。私が、何と云つても、はか〳〵しく返事もしない。緊張しきつた心を、それだけの餘裕もないと風なのである。

私はそつと部屋を出た。そして院長に會うて樣子をきいて見た。

「何とも申上ません。しかし、絕望といふわけでは無いのです。」

と老院長は答へてから、

「小兒もですが、私は、あのお母さんの方が心配ですよ。入院以來、四日になりますが、殆ど一睡もなさらんらしい。看護婦も附いてゐる事だから、少しお休みなさいといふのですが、あゝして枕許に坐りきりで、一刻も小供から眼を離さないのです。血液の型も丁度合つてゐるので、二度も輸血をしたので、母親の身體もずゐ分弱つてゐるのですがな。」

「輸血？」

その頃は、まだ輸血療法といふ事が今のやうに盛んに行はれてゐなかつた。

何百グラムかの小夜子の血が、あの英吉の身體に移されたのだ。小夜子のあのやせた身體から何百グラムかの血を——。

「いや、母親の方もあまり丈夫さうぢや無いので、二度目のは外の人からと云つたのですが、どうしても私の血で云はれるのでなあ。——なたは、あの御婦人とどういふ關係の方か知りませんが、兎に角、すこし休息してくれるやうに、御婦人にすゝめて下さらんか。」

斯う云ふ老院長の言葉を私は、病室に戻つて、小夜子に傳へた。

「えゝ、えゝ、あとで。でも、今夜一晩が峠だと云ふんですもの。」

「併し無理をして肝腎のあなたが倒れちや困るぢやありませんか。」

「大丈夫！　英坊がよくなる迄は、私、倒れなんかしません。——もし英坊が惡くなるなら、私、倒れてしまつても惜しくはありません。」

さういふ小夜子の言葉に對して、私に何か云へたらう？　小夜子は母だつたのだ！　その生命その存在の全部をあげて小夜子は一人の母だつたのだ。小夜子は、一人の母以外の何ものでもなかつたのだ！　私は心の中で、ひとりひそかに恥ぢたのである。

これほどの母の愛が神明に通はぬ筈は無かつた。それからなほ二日ばかり間、生死の堺に彷徨した英吉は、遂に命をとりとめた。

もし、此の時、英吉が死んだなら、井上家の一粒種は空しく朽ちてしまつたのであらうが、英吉は、とう〳〵助かつたのである。

試驗を受けて、その資格をとり、小夜子が府下の小學校の、裁縫の專科教師として赴任する事になつたのは、それから一年ばかりの後であつた。

裁縫仕事の内職で、母子二人のくらしを立てて行く事が隨分骨が折れた。肩を凝らし、指先に血をにじませて朝から晩まで坐りつゞけ、過勞の爲めにやつれて行く小夜子を見るのは私としても辛かつた。で、私は、小夜子の爲めに、比較的樂な勤め口を探してやつたが、それも三月とは續かなかつたのは、その明眸に慕い寄る無耻な男共がうるさかつたからの事であらう。

「府下とはいつても、ずゐ分ひどい山の中らしいの。でも、私、山の中の方が呑氣でいゝと思ひますわ。それに、英吉の健康の爲めにも、東京より田舍の方がいゝと思ひます。それは、東京に居れば、時には、あなたにもお會ひ出來ますし——田舍へ行くのは淋しい事は淋しいけれど、英吉は田舍で育てた方がいゝと思ふんですの。」

さういふ言葉を殘して小夜子はその時六つになつてゐた英吉を携へて東京を去つた。多摩川の溪谷を奥へ奥へとさかのぼつた山又山の中へ。汽車の停車場には山路を六七里もあるといふ山の村へ。

山姥

（見えるものは山ばかり、きこえるものは谷川の音ばかり、島流しではない山流しの淋しさを、毎日子供の相手をしてゐるので、さほどには感じません。嬉しいのは村の人達の親切で、とりわけ、私の間借をして居ります此の家には、優しいお婆さんがゐて私の留守中は英坊の面倒を見て下さいますが、眞實の孫でもあるかのやうに大事にして下さるので、それが何より有りがたいと思ひます。英吉も、空氣がいゝせゐか、日毎に丈夫になつて行くやうでございます。）

最初の手紙はそんな風に書かれてゐた。それから小夜子は、時々思ひ出したやうにたよりをよこしたが、それも次第に間遠になつて行つた。

夏の休み、春の休みにも、小夜子はそこに居据つて、東京には出て來なかつた。いや、稀に出て來る事があつても、わざと私には知らせなかつたのかも知れない。

郊外に散歩に出た時など、野末に一抹の藍を浮べた遠い山のすがたを眺めながら、小夜子のゐるのはあのあたりかと思ひを馳せる事はあつても、私も小夜子を訪ねようとはしなかつた。

會ひたい氣持の動くうちは、會つてはならぬ人だと思つたのだ。

私の生活も忙しかつた。小夜子が山に去つてから間もなく私には二番目の子供が出來たし、相變らずパツとしない三流作家として、生活の惱みもあれば、藝術上の苦しみもあり、その

毎日にかまけて、小夜子の事もいつか念頭に薄らいで忘れ果てたといふのではないが、小夜子は夕雲のやうに遠い人になつて來てゐた。

ほんの當座のつもりで行つたその山の中で小夜子は、二年三年と月日を重ねた。

あの美しい人も、さうした山の中で老い朽ちて行くのか？

時々、思ひ出していたましい氣もしたが、山中の素朴な人情と、掻き亂すものもない安らかさとか、彼女をそこに惹きつけてゐるらしかつた。

（何よりも嬉しい事は、英吉が、病氣一つしないで、すく〳〵と育つて呉れる事で御座います。その代り人一倍腕白で、毎日あばれ廻つて居ります。険しい山坂を物ともせず、まるで猿のやうに馳け歩いて居ります。英吉は山猿、私は、山姥といふところでございます。山の中ですから、なりふりをつくらふ必要もなく、鏡に向はずにくらすやうな日が多いのでございます。その代り私も丈夫になり一頃よりずつとふとつてまゐりました。東京へ出たついでには、一度おたづねし、久振りにてお目もじ致し度いと思ひますが、見すぼらしい此の山姥姿をお目にかけるのが何となくお恥かしく——。）

四年目の春の事だつた。そんな山の中にも、所謂文學青年といふものが居て、小夜子と同じ

學校に代用教員をしてゐたのが、志をたてて上京したその青年を紹介かた〳〵の小夜子の手紙には、そんな風に書かれてゐた。私は、その青年の口から、小夜子の樣子を詳しくきく事が出來たのだが、その青年は斯う云つた。

「井上先生は、そりやもう、村では女神のやうに思はれてゐますよ。しとやかで、やさしくて、それで上品で——。はじめのうちはそんな人がどうしてこんなところに來たのだらうと、皆、不思議がつて、何だか薄氣味惡くさへ思つてゐたものですがね。それでゐてざつくばらんで、氣取つたところなんか一つもない、何人に對してもにこ〳〵と愛想がよく——愛想がいゝだけぢやない、心から親切なんですからね。生徒には勿論、大もてで——。こんな事もありました何しろ、村の君衆にや風儀のよくないのもゐましたから、先生が學校へ通ふ途中など、とんでもない事を云つて、先生を眞赤にさせたりする事もあつたので、生徒等は、みんな先生の前後左右をとりまいて、みんなで眼を剝いて、さういふ奴を睨みつけたものです。まあ、護衛兵といふわけです。」

「は、は。君もその護衛兵の一人だつたんだね。」

「いゝえ、私は、あの時はもう中學生でしたから、私は、遠くから眺めて、唯、崇拜してゐた

だけです。」

「祟拜？」

と、私が笑ひながら、問ひ返すと、青年は、あくまでも眞面目な顏附で、

「美しいといふより氣高い人だと思ひました。私ばかりではありません。先生は、村中から崇拜されて――今でも、ゐます。はじめは、兎や角と、出鱈目のゴシップを飛ばしたりする奴もありましたが、今ぢやそんな者は一人もありません。年寄でも子供でも、みんな、井上先生を慕つてゐます。――祟拜してゐます。」

「うむ。」

「本當にあんなに、立派な人はありません。」

「子供も丈夫に育つてゐるさうだね。」

「ええ、可愛いゝ坊ちやんです。村の者は、井上先生の子供だけは坊ちやんと呼んで居ます。そりや相當腕白もやりますが、頭のいゝしつかりした子です。」

井上家の一粒種は、立派に育つてゐるのだ――。

「なか〳〵利かん氣の子で、何人の云ふ事もききませんが、お母さんにだけは――井上先生に

だけは不思議に素直なんです。お母さんの可愛がる事もですが、坊ちやんのお母さん思ひも非常なものです。」

青年が然う云ふのをきくと、私は覺えず涙を催した。

小夜子も獨身の道は淋しい道だ。だが、輝かしい勝利の道だ。私は心に小夜子を祝福した。

だのに、私の眼から危く熱い涙がこぼれさうになつた――。

小夜子が、その山の村から出て、そこから少しはなれた小さな町に轉任したのは、英吉が十三になり、その町の中學校にはいる事になつたからである。

それを報告かた〳〵、英吉をつれて、私の家をたづねて來た小夜子に、私は八年振で會つた八年――一昔に近いその間、私は小夜子を見無かつたのである。行かうと思へば、四五時間かゝれば行けるほどの近くにゐた小夜子だつたのに――。」

「山姥がまゐりましたよ。」

などと、笑ひながら、私の家の玄關をはいつて來た小夜子を迎へた私の感慨――それは、こ

ゝで語るまでも無からう。

「何が山姥です？　相變らずの小夜子さんぢやありませんか。併し金太郎は大きくなりましたねえ。」

胸にあふれる感慨を、そんな冗談にまぎらしながら、私は母子を請じ入れた。

母の脇に引き添ふやうにして、新しい中學生の制服の膝をきちんと揃へた英吉をながめながら、私の妻の波子は、

「まあ、本當に立派におなりになつて——。それにまあ、何とお母さんによく似ていらつしやるでせう。」

本當に、英吉は小夜子によく似てゐた。濃い眉、切長な眼——井上家代々の肉體的特徴であるところの見事な鼻染は、小夜子のものであり、同時にまたあの彌右衞門のものであつた。

「それに、小夜子さんも、前とそんなにお變りにならない——」

これは、七分通り本當であつた。思つたほどには小夜子は變つてゐなかつた。色は少し黝んだが肉附などは前よりずつとよくなりそのみづ〳〵しい眼の色は、矢張元通りの小夜子であつた。

「いゝえ、もう、私、すつかりお婆さんになつてしまひました。それに、まるきり田舍者になつてしまつて、だらしがないぢやありませんか、汽車を降りて、人通りの中に出ましたら、眼がちら〳〵して困りましたわ。おまけに、電車の乘換をまちがへたりして——」

「しかし、よく辛抱しましたねえ。」

「英吉の身體にもいゝやうですし、それに、村の人が大事にして呉れましたので。」

「英坊。本當に大きくなつたなあ。大へん、よく出來るんだつてね。」

私が英吉にいふと、英吉は、一寸はにかみ笑ひをした。

「英吉。お前この小父さまを覺えはゐないだらうねえ。」

母に云はれると、

「知つてら。雜誌の口繪で見たもの。」

雜誌の口繪で顏を見覺えてゐたといふのである。

「まだ赤ん坊の時分はね、抱つこしていた事もあるんですよ。」

英吉は、不思議さうな眼附で私の顏を見上げた。

そこへ、外に遊びに出て居た私の子供等が、十になる洋一と、六つになる美保子とが歸つて

來た。

洋一と英吉とははじめのうちに、路で行き會つた二匹の犬がお互ひのにほひを嗅ぎ合ふやうな、そんな顏で眺め合つてゐたが、すぐに子供らしく打解けて、洋一は、自分の部屋へ英吉を連れて行つた。美保子も一緒について行つて、三人とも、手もなく友達になつてしまつたらしい。子供部屋からきこえて來る、晴れやかなさゞめきをきゝながら、

「もう、あの通りですよ。英坊は、うちの洋一のために、いゝ兄さになつて呉れるでせうよ。」

私が云ふと、

「仲好しになつて頂き度いのよ。」

小夜子も微笑んだ。

熱い涙に濡れた事もある眼だつた。はげしい情熱に燃えた事もある眼だつた。しかし、今は山の湖のやうに靜かに澄んでゐた。數へて見れば小夜子ももう三十四歳、花木の春は過ぎてしつとりと綠の蔭深く、まだ秋といふのには早いが、すべてを昔の夢にして母以外の何ものでもなくなつた小夜子だつた。私の心ももう騷ぎはしない。今こそ、私も小夜子の爲めに完全な兄になれる氣がした。

「どうでせう。小夜子さん。」

と、私は云つた。

「いつその事、もう一度東京へ出て來て、英坊に、東京の中學に入れる事にしたら。さうすれば、洋一も、いゝ相棒になれるぢや無いですか。」

「それはね、私も考へて見たんですのよ。でも、矢張、田舍に置いた方がいゝと思ひましてね。」

「健康の爲めにですか？」

「それもありますけど、東京に居りますと——」

云ひ淀む小夜子の顏附から、私は忘れてゐた一つの事を思ひ出した。さうだ、どうしてそれを忘れてゐたのだらう？　あれから十年近く、杳として消息を絶つた嘉市の生死のほどもはつきりしないが、若しかして東京にまひもどつてゐて、小夜子たちを探してゐるとすれば——。さうだ、小夜子は、嘉市に、英吉を會はせるを恐れてゐるのだ。小夜子が、山に隱れてゐたのは、あの凶々しい思想に呪はれた嘉市から、英吉をまもらうが爲でもあつたのだ。

私は、すこし聲をひそめて云つた。

「あの、嘉市君はどうしてゐるのですか、まるつきり、わからないのですか。」

「わかりません。英吉には、もう死んでしまつた事にしてあるんですの。――でもね、私が東京に出て來ないのは、そればかりぢや無いんですの。」

「といふと――。」

「第一、私が出て來る氣になれないんですの。」

「あなた自身が――。」

「亡くなりました父は、あの通り强情な人ですから、口では何にも云ひませんでした。いゝえ、口では反對の事を云つてゐましたけど矢張、土の中に育つた人なんですわねえ。始終田舍を戀しがつてゐたやうですわ。」

「それはわかります。」

「その父の血が私にも流れてゐるんでせう。私も、物心づいてからは、東京にばかり育つてゐたんですけど、東京といふところ、私の性に合はないんです。私、とても、田舍が好きなんですの。でなかつたら、あんな山の中に十年近くも辛抱は出來なつた筈ですわ。」

「それもわかります。いや、さう云ふ、僕だつて矢張さうだ。僕だつて、どうも東京の鋪道には足がつききらないんです。」

「さういふ氣持が、あの子にも傳はつてゐるんぢやないかと思ひますの。あの子、東京なんかいやだと云ひましてね。」

「ふうむ。」

「子供つてものは、賑やかなところが好きなものでせう。だのに、あの子、不思議に東京を戀しがりませんの。今度出てまゐりましても、何んだ、うるせえところだなあ、なんて申しきして。」

「ふむ。」

と私は深くうなづいた。

血がものを云つてゐるのだ。

代々土に生れ、土に活きた井上家の血は、あの幼い者の脈管に未だ健かに脈打つてゐるのでは無いか。

「鄕里の話をしますと、そこへ行き度いと申しますの。でも、家も何も無いのでと申しますと淋しさうな顏をして――」

小夜子は、しんみりと云つて見せたが、

「でも、そのうちに、一度、墓參にだけは伴れて行つてやり度いと思ひますの。父や母の墓にも、ずつと御無沙汰して居りまして——」

「一緒に行きませうか。」

「どうぞ——。でも、郷里の方では、私共の事などもう忘れてしまつてゐるんでせうねえ。」

淋しさうな顔だつた。

「そんな事はありませんよ。僕の父などは、いつも、いつも、あなたのお噂さしてゐます。」

「さうでせうか？　あの、お父様はあひかはらず御達者で？」

「え！　年齢が年齢ですから、もう太分弱つてはゐますが、丈夫な事は丈夫です。どうです、これから、一寸郷里へ行つて見ませんか。今夜は僕の家へ泊る事にして、僕も家ぢう、みんなして行きますから。

小夜子は少なからず躊躇したが、波子も傍から、

「さうなさいましよ。今日はお天氣もようございますし——。」

と熱心にすゝめたので、小夜子も、では——といふ事になつた。

小夜子と英吉と、それに私共親子四人が打揃つての突然の訪問がどんなに私の兩親を、よろ

こばした事であらう。出たのが午後も遲つたので着いたのは宵を過ぎてからであつた。早寢の父は寢床から飛び起きて、

「おう、おう、よく來た。よく來た。」

の連發であつたが、

「お父さん、珍らしい人を伴れて來ましたよ。」

私が小夜子をかへりみて云ふと、

「おゝ！」

と、父は大きくうめいた。

「おぢさま、もうお忘れになつたかも知れませんが。」

小夜子が笑ひながら云ふと、

「何が忘れるものかよ。——おう、これが、これが坊やか。や、大きくなつたぞ。いゝ子になつたぞ。あんたも、苦勞なすつたなあ！　この子をこれだけにするまでにや——」

「おぢさま、まあ、此の子を見てやつて下さいまし。」

さう云つた時、小夜子の眼が涙で一杯になつてゐるのを私は見た。

祖霊

その夜は、小夜子母子も、私共と共に、田舎の家に一泊した。

あくる朝、私共が起き出した時は、次の間の小夜子母子の寢床は空になつてゐた。

「えらい早起だ。小夜子さんは、子供と二人で、そこらを歩いて來ると云つて出て行つた。」

爐端に坐つてゐた父は斯う云つた。

私は、井戸のはたで顏を洗ふと、あの池の端の邸あとの方へ歩いて行つた。微風にそよぐ籔の間の露じめりのした小徑を爪先あがりに踏んで、私は丘の上に出た。淡みどりの紗を張つたやうな一面の桑畑――それが池の端の邸あとだ。

春曉の空は、瑠璃色に晴れて、どこかで、鶯の聲がしてゐた。私は、桑畑の中の小徑にはいつて行つた。

しよろ〳〵と流れる水の音が耳についた。

その音の絶えぬ限り井上家はほろびない――それを思はせる水の音だ。古い歴史をもつ井上

家のその代々の先人たちの靈のさゝやきかとも思はれるその水の音だ。ありし日の井上家の、その數奇を凝らした後庭の築山をめぐつて流れてゐたその泉水の水の音だ。

私は、佇立してその水の音に耳を傾けた。人の聲も耳にはいつて來た。小夜子と英吉との語り合つてゐる聲だ。――果然、小夜子たちはこゝに來てゐたのである。

築山の名殘りを、小高くもりあがつた岩ぐみにだけ見せたところ――その一つの石の上に英吉と並んで腰をおろした小夜子は、私の姿を見ると、

「あら！」

と若々しい聲をあげて、

「お早うございます。」

「お早う。」

私は微笑をかへして、歩み寄つて行つた。

「英吉に、昔の家のあとを見せに來たのでございますよ。」

「どうだ。英吉君、こゝに君の家があつたんだぜ。立派な土藏が三つもあつてね、そりや、すばらしい家だつたぜ。」

英吉は、默つてうなづき、うるんだ大きな眼をあげて、廣い桑畑を見渡すのであつた。

「此の子はね、邦夫さん、今に昔の通りのお家をこゝに建てるのだと云つてゐますよ。」

「さうだ。さうだ。坊や、しつかりやるんだ。そして、井上の家をもう一度立派に起すのだ。」

「うん。」

英吉は、口元を引きしめるやうにして、こつくりを一つした。

賢いとはいへ、まだ十三の子供に、何人がこれだけの決意を促したのであらう。それは、小夜子ばかりではない。井上家代々の靈が英吉の小さい心に宿つて、それが英吉を、この覺悟にまで導いたのだ、とその時、私が然う思つたのは單なる思ひ做しであつたらうか？

それからは私は、小夜子母子と共に井上家の墓を訪ねた。

「これがお前のお祖父さんのお墓こちらがお祖母さんのお墓。」

小夜子に敎へられて、英吉は殊勝らしくその墓標の前にぬかづいた。

「それからね、これは、英吉、お前の叔父さんのお墓。」

「叔父さん？　僕に叔父さんがあつたの？」

「えゝ、叔父さんがおいでになつたのですよ。小さい叔父さんがね。」

「小さい叔父さん？」

英吉はいぶかしげに母の顏を眺めた。

「まだお前よりも小さい時にお亡くなりになつたんですよ。」

さう英吉に說明する小夜子の言葉を聞きながら、私は、あのかあいさうな道也の事を思ひかへした。道也は所詮亡びる可く運命づけられた末流の子であつた。腕白ではあつたが、色の青白い、首の細い、あの道也にくらべれば、英吉は何といふ逞しい子であらう。井上家の血は、英吉に於て新しく蘇つたのだ。

「坊や。」

私は、英吉のくり〳〵と肥つた肩に手を置いて云つた。

「坊やは丈夫だな。本當に坊やはしつかりしてゐる。」

そして、私は、小夜子に向つて斯う云はずにはゐられ無かつた。

「小夜子さん、みんなあなたの丹誠ですよ。あなたの丹誠の甲斐があつたのですよ。」

凡そ十年近い間、全く消息を絶つてゐた嘉市が、突然、私の前に姿をあらはしたのは、その年の末の事であつた。

その時、昭和十三年に勃發した支那事變が、大東亞戰爭の序曲たる深刻さを以て展開しつゝある最中に、突然、全く突然、嘉市は私の家の玄關に立つたのである。

「へんな人がまゐりましたよ。八木嘉市といふ者ですが、是非お目にかゝり度いと云つて――。」

取次に出た妻は、顏色をかへて私に告げた。

「嘉市！　嘉市が――」

私の顏色もかはつたに違ひ無い。

「御存じなんですか？」

妻は聞ひ返したが、

「あ。」

と氣がついて、

「小夜子さんの旦那さん？　さうでしたわね。」

「どんな風をしてゐる？」

「まるで乞食見たいな――。でも、何だかおど〳〵して――。」

「さうか。ぢや、兎に角會つて見よう。」

應接間に通しておいてから、どういふ態度で會ふ可きか、私は十分近くも考へてから出て行つた。

椅子の端に腰をかけ、背をすぼめて、じつと卓の面をみつめてゐた古背廣の一人の男――それが嘉市だつた。

「やあ！」

と聲をかけると、慌てゝ立ちあがつて、

「突然、うかゞひまして――。」

さういふ聲も弱々しい。額がぬけあがり、顎が細つて、十年の間に、嘉市は二十も年をとつてゐた

「久振ですね。どうしてゐました？」

「最近は、九州の炭坑で働いてゐました。それまでの事は、ちよつとやそつとではお話がしきれません。」

「失禮ですが、何しにこゝへやつて來たんです。」

私の言葉は、自然とげ〳〵しいものになつて居た。嘉市ときいて反射的に私の頭に浮んだのは小夜子母子の事だつた。小夜子母子を此の男から護らねばならない！　その意識で、私の心は甲はれてゐたのである。

「いや、全く面目次第もありません。かうしてお訪ね出來た義理ぢやありませんが――邦夫さん、これだけの事は、先づ第一にあなたに誓ひます。私は、もう、昔のあの間違つた考へはきれいに精算しました。刑罰も受けました。――今ではもうすつかり轉向してゐるのです。」

「それは結構です。」

「お疑ひなら、警察の方へ照會して下さい。もう二三年前に私は本當の日本人の道に戻つたのです。そこへ今度の事變です。若い者は皆な國の爲めに死んでゐます。私は、私は――今度東京へ出て來ると、すぐに二重橋の前に行つて、砂に額を埋めて泣きました。」

「さうなけりやならない筈ですよ。それが本當なら、僕だつてどんなに嬉しいか知れません。」

「信じて下さい。それを信じていたゞけないと――。」

嘉市は平手で額をこすつた。此の寒い夜に、彼の額には汗のやうなものが浮いてゐた。その

手は節くれだつてゐた。

嘉市は續けた。

「全く、過去の事を考へると魔がさしたとしか思へません。女房子供まで打つちやつて――馬鹿げた夢を見たものですよ。」

「小夜子さんに會つたんですか？」

「いゝえ、合はせる顔もありませんし、何處にゐるやらそれも判りませんし――。」

嘉市は哀願するやうに眼をあげて、

「小夜子等は、無事でくらしてゐるでせうか？」

「小夜子さんたちの事は、うつかりお話出來ないな。――君は、もう、夫たる權利も父たる義務も、とつくに抱棄してしまつてゐるんだからね。」

こんな意地の悪い云ひ方を、私は矢張しずには居られ無かつた。

「仰有る通りです。ですが、矢張忘れる事は出來無えんで――。」

と、昔、よく使つた田舍言葉を出して、

「二三年こつち、悪い夢が覺めると同時に、しじう、思ひ出してゐたんで――。」

「しかし、小夜子さんの方ぢや、もうすつかり忘れてゐるらしいですよ。」

「さうでせうとも。」

「今、君と小夜子さんたちに會はせる事は、小夜子さんたちを苦める事にしかならないと僕は思ふんですがね。」

「はい。——ですがこれだけ敎へて下さい。あれ等は無事に暮してゐるでせうか？　あんたには、いろ〳〵御厄介になつた事と思ひますが、子供も、丈夫で育つてゐるでせうか？」

「僕は、何にもお世話などしてあげやしませんでした。子供は、小夜子さん一人の手で立派に育てゝゐますよ。今年の春中學に入りました。」

「一人の手で？　ぢや、小夜子はまだ獨身でくらしてゐるんです。」

「再婚したとでも思つてゐたんですか。呑氣なものだ。小夜子さんはそんな人ぢや無いんです。」

私は、へんに腹が立つて來たので、勢ひ叩きつけるやうな調子になつてゐた。

「さうですか？　——あゝ、さうですか？」

「獨身でゐようが、再婚しようが、君に何の關係もない事だ。僕は云ふが、若し、君が、小夜子さん達に會ひ度いと思つて、かうして、僕を訪ねて來たのだつたら、それは無駄な事だ。」

あとで思へば、然うまで云はなくてもよかつた事だが——私のその時のむしやくしや腹は、私に斯う云はせずには措かなかつた。

「會はせて下さいと云ふのぢや無えんです。」

流石にむつとしたらしいが、その憤りを抑へる努力の爲めにわな〳〵と肩をふるはして、

「何と云はれても、まつたく、返す言葉は無えんです。いや——私は唯、あれ等が無事にくらして居るとさへ判りや、それでいゝんです。」

喘ぎ喘ぎ云つて、再び低く頭を垂れてしまつた嘉市を見ると、私も少し氣の毒になつて來た。

「それで——東京へ來て、これからどうするつもりなんです？」

「東京ぢや暮らせさうも無えんで——何處か田舍へ行つて、作男にでもならうと思ひます。——邦夫さん、私や矢張百姓の子だ。此頃、しきりに野良が戀いしくなつて來ました。——今思へば、はじめ、東京へ出て來たのが間違ひだつた。どんなみじめな小作百姓にしろ、鄕里で百姓をしてゐれば宜かつたんだと、つく〳〵さう思ふんです。」

「うむ。」

「鄕里に歸つて、もう一度百姓をしてえと思ふんだが、今となつちや、それも出來無え。——

どこかへ行つて、作男に使つて貰ふなりする外無えと思つてゐます。なに、野良仕事なら、ま
だ一人前以上にア働けると思ひます。」

「そりやいゝ考へだな。」

私も同情した。

「邦夫さん。こんな事云ふと、又、叱られるかも知れ無えが、そのうち、私が本當に改心した眞人間の道に戻つたと、あんたの眼でみとめがついたら——お願ひだ、一度、小夜子や子供に會はせて下せえ。」

「承知しました。」

「お邪魔しました。」

嘉市は、思ひ切つたやうに立ちあがつた。

打ちしほれた姿を見ると、私は、もう少しと云つて引きとめ度い氣がした。が、私のうちの何ものかが、それを拒んだ。私は、そのまゝ、彼を送り出した。

師走の雨の、つめたく降りしきる夜であつた。

「どうなすつたの?」

と、玄關から引きかへした私を待ち構へるやうにして、妻の波子に斯うきいた。私が、簡單に事の次第をつげると、妻は、

「でも、矢張、會はせてあげた方がよかないのか知ら?」

「さうかな。」

「小夜子さん、矢張、會ひ度がつてゐらつしやるんぢや無いか知ら?」

「そんな事があるものか?」

「だけど——さう一口に片づけておしまひになつちや——。」

女の心は女が知るとでも云ひ度げな眼色を妻の顏色に讀むと、私は何かぎくりとした。あゝして嘉市を追ひかへした私の心は、果して公正なものであつたらうか?

年があけ、正月も末になつた頃、嘉市から手紙が來た。甲府の近くの農園で働いてゐるといふ事を、そこから知らせてよこしたのである。此村でも、滿洲への移住が問題になつて居る自分も出來る事なら、滿洲の拓士となり、殘る半生を國家的な仕事に捧げて見度いなどとも書かれてゐた。小夜子たちの事については、一言も觸れてゐなかつた。

この私の思ひ出の記は、ここでかなしい一節に到達した。それを書くのは私は辛い。けれども私は書かなければならない。

（母が、病氣でねてゐます。はじめは、かぜを引いたのですが、毎日、高い熱がつゞき、だん〳〵惡くなるばかりです。母は、おぢさまに是非お眼にかゝりたいと云つてゐます。おぢさま、一度見に來て下さい。）

英吉の書いたさういふ手紙がとゞいたのは、その年の三月の末になつてからであつた。この手紙が、いかに私を驚かしたかは云ふまでもない。

かりそめの病氣でない事は、たゞ〳〵しい英吉の手紙の文字の間にも、はつきりと讀みとられた。私は、不吉な豫感におびやかされながら、早速、小夜子のゐる村に出かけて行つた。

はじめて訪ねる小夜子の家は、峽谷の入口の小さい村の、川沿の小家であつた。

小夜子は、氷嚢の下から青白い顏を少しこちらへ向けて、

「まあ、いらしつて下さつたのね。」

さびしく笑つて見せた。娘時代によく見せたあの、白い花の咲いたやうなさびしい笑ひであつた。

丁度廻診に來あはせてゐた村の醫者は、風邪をこじらせて肺炎になつたのが、油斷のならない狀態だと私にさゝやいてきかせた。

不死なるもの

こゝに置いては、充分の手當も出來ないと考へた私は、それ程までにする必要はないとこぼす小夜子を、むりやりに納得させて、町の病院に運んだ。そして私は町に宿をとつて、その病狀をみまもつてゐたが、病勢は急激に惡化し、三日目には危險狀態にまで漸んで行つた。

「嘉市君に會ひ度いとは思ひませんか。」

私は、私自身の反對を押切つて斯う訊いて見た。

小夜子は、うるんだ眼で私の顏をみつめてゐたが、

「會へるものなら――」

幽かにさう云つて眼を閉ぢた。矢張、會ひたがつてゐるのだ。

私はすぐに嘉市に電報を打つた。そのあくる日の午後に嘉市は病院にやつて來た。私はさつといきさつを話して、

「兎に角、もう明日にもわからないといふ狀態になつてゐるんだ。會ひ給へ。」

呆然としてゐる嘉市を、私は病室の中につき入れた。二人だけで會はす可きだと考へた私は扉の外に立つてゐた。これは私の二度目の讓歩だつた。辛い辛い讓歩であつたと、私はこゝで正直に告白する。

からだは扉の外に置いても、私の心は扉の中に吸ひ寄せられてゐた。私は全身を耳にして、室内の氣配をきゝすましてゐたが、やがて私の耳に入つたものは、忍びやかなすゝり泣きの聲であつた。

小夜子が泣いてゐる。曾て、涙など見せた事のない小夜子が——その忍びやかなすゝり泣きは、次第に高まり高まつて、むしろ慟哭のはげしさにまで達してゐるではないか？

その嗚咽の聲をききながら、私は全身を揉みしだかれる思ひがした。勿論、嫉妬とも云ふ可き感情がそこに多分に動いてゐた事をも、私は正直に告白す可きであらう。私はもうそこにさうしてゐるに堪えなくなり、病院の外に走り出た。そして私はその邊を、あてもなく歩き廻つた。灰ざれた田舍町の家並の間から、強く立つ埃風に彼岸櫻の花が亂れ散つてゐた。

私は、三十分ばかり歩き廻つて病院にかへつた。病室にはいると小夜子は昏々と眠つてゐた嘉市は枕元の椅子にかけ、背を丸く、兩手で顏をかきむしるやうにしてゐた。指の間からは涙がにじみ出してゐた。

その夜、おそく、急便を以て呼びよせられた英吉、嘉市、それから私の三人に看まもられながら小夜子は遂に息を引き取つた。息を引きとる前、溷濁した意識の不思議にすみわたつた一時に、小夜子は、私の顏を見上げて、

「長い間、いろ〳〵お世話になりました。どうぞ、英吉の事を——英吉の事を——」

「大丈夫だ。小夜子さん。」

「お願ひ——お願ひします。」

それが私への最後の言葉であつた。

「お母さん！」

と一聲鋭く叫んだきり、息を力ませて、一生懸命にその悲しみを支へながら、涙の一ぱいたまつた眼で、ぢつと母の死顏をみつめてゐる英吉。母の死顏をみつめたまゝ、いつまでも枕元

から離れようとしない英吉。その英吉の小さい肩を抱いて、

「英坊、しつかりするんだぞ。」

と私は云つた。嘉市は――さつきから、しつかりと小夜子の手を握りしめてゐた嘉市はその手に顔を押しあてゝ、これもいつまでもそこを動かうとはしなかつた。

「嘉市君！」

と、私は、へんに腹立たしくなり、叱咤するやうにかう云つた。

「何時までさうしてゐるんだ。さあ、しつかりしたまへ。」

私はその手を憎んだのである。小夜子の手を握つて離さぬその嘉市の手を――。

小夜子は死んだ。そして、その屍骸は、郷里の村のあの井上家代々の墓地に葬られた。

淋しい葬式であつた。が、私は、それがどんな大きな花輪で飾つても飾り足りない母性の凱旋である事を、喪主として位牌を捧げて英吉の、しつかりした態度から感じた。

「矢張なあ、池の端の血は爭はれ無え。立派な坊ちやんぢや無えか。」

と、部落の人たちはかう囁き合つてゐた。

母を失つた英吉を、引取つて一緒に暮らし度いと嘉市は私に申出たが、私はそれに應ずる事が出來なかつた。

「駄目だ！　君は長い間父たる義務を拋擲してゐた人間だ。僕は、英吉君を君の手に委ねる事は出來ない。第一、君に英吉君の父たる可き資格があるか。いや、君の生活力について云つてゐるのぢや無い。さういふ物質的な問題について云つてゐるのぢや無い。君はその魂を外道に賣した人間ぢや無いか。」

私が斯うぴしぴしとやつつけたのは、純粹の正義感からばかりだとは云へ無かつたらう。私の心には嘉市に對する長い間の鬱憤が、まだ晴れきつてはゐなかつたのである。

「まだ、信用していただけないでせうか。私は過去の一切を、きれいに清算してゐるつもりですが――」

「それはまあ信用するとしても、君は小夜子さんの苦勞の十分の一にだけでも酬ゐるだけの、何の事實をも爲してゐないぢやあ無いか、英吉君は小夜子さんの生涯の苦勞の結晶なのだ。君は、そのまゝで英吉君の父となる事は出來ないと思ふが――」

私の感情の論理は、私にさう云はせずにはゐなかつた。

嘉市は、しばらくの間うなだれてゐたが、

「御尤です。」

と案外素直にうなづいて、

「私は、英吉について何の權利をも主張する事の出來ない人間でした。英吉の事は、その時が來るまで、あなたにお願ひ致します」

さういふ言葉を殘して嘉市は歸つていつた。

英吉は、私の家に引きとり、東京の中學に通はせる事にした。母を失つた英吉は、しかし、伸び行く生命の力で直ぐにそのかなしみをはねかへし、すぐに本來の快活さをとり戻した。

三つ違ひの私の長男の誠一とも、それから誠一の妹の芳子とも仲好くなり、知らぬ人は、英吉が私の長男で、誠一たちの兄だと思ふくらゐであつた。

嘉市が、拓士となつて滿洲に渡つたのは、その年の末になつてからであつた。

「私が、あんな風に、邪道に迷ひ込む事になつたのは、土を離れた爲めだつたといふことがはつきりわかりました。私は元の百姓に戻つて、殘りの半生を、眞黑になつて働くつもりです。

ですが鄕里へ歸つても、私には掌ほどの土地も無えんですから、滿洲へ出かけて行つて百姓をします。」

別れを告げに來た嘉市は、かう云つてその眼を新しい希望に輝かしてゐた。

これには私も大贊成だつた。私自身も、長い間の文壇生活の疲勞と共に、百姓の子の本質にかへらうとする土への鄕愁が、益々強いものとなつて行きつゝあつた。そのくせ、思ひ切つて歸農を斷行す可く、一切の羈伴を斷ちきるだけの勇氣を失つてゐる事を、自ら悲しんでゐる私はそれが出來る嘉市を寧ろ羨ましく思つてゐた。

「英吉。」

と嘉市は英吉に云つた。

「おれは滿洲に行くからな。お前は、山岡の小父さんに厄介になつてしつかり、勉强してゐて呉れ。そしていつか一度は滿洲のお父さんのところにたづねて來て呉れよ。」

「えゝ」

と、英吉ははつきりと答へ、やゝかなしみを帶びた眼付で嘉市の顏を打戍つてゐた。母の死と同時に突然、自分の前にあらはれた父、それが自分の父である事を、英吉はまだ充分には信

じ切れぬといふ風に見えた。

「あの子は、矢張私をまだ親父とは思へずにゐるらしいですね。いや、無理もない話です。」

さびしさうに云つて、溜息を吐く嘉市を見ると、私は氣の毒にも思つたが、それが當然だとも思つた。私自身にしてからが英吉に、さう易々と嘉市を父とは呼ばせたくない氣がしたのである。

東滿の開拓地に赴いた嘉市からは、屢々通信があつた。沍寒と戰ひつゝ荒蕪を開き、そこに大陸日本の基礎を築きつゝある土の戰士の、希望と意氣とは、その手紙の一字々々に滿ち溢れてゐた。

（私の前には、無限の處女地が横はつてゐます。鍬を持つた私の腕には新しい力が漲つてゐます貧しい小作百姓の子に生れて、耕すべき土地の缺乏を嘆いてゐた私の、いや、私ばかりではない、私の父、その又父、先祖代々の土地に對する渴望は、今、充分に充たされてゐます。）

手紙はそんな風に書かれてゐた。

（土が私の精神の汚れをすつかり洗つて呉れます。土の禊です。私は土によつて日一日と清められて行きます。）

とも書かれ、

（長い間、私が憑かれてゐた階級思想――あの惡思想も、思へば皆此の缺乏がさせたわざでした。小さい日本の狹い天地で、乏しい土地を爭ひ合つたのは皆昔の事です。私に日本の國土は無限にひらけてゐます。諸君よ、こゝに來給へと、私は大きな聲で、此の滿洲の一角から叫んで居ます。）

とも書かれてゐた。

嘉市は見事に更生した。嘉市の農民精神は、決して滅びてしまひはしなかつたのだ。土に仕へて土に生き、土を愛して土に死んだ彼の祖先の血は、脈々として彼の脈管に傳はり、それが今、すこやかによみがへつたのだ。

さうだ。嘉市は今母なる大地にかへつたのだ。

私は、嘉市の爲めに祝福した。

そのあくる年の三月中學を卒へる少し前の事である。

「小父さん。」

私の書齋へはひつて來た英吉は、ひどく改たまつた調子で、私に呼びかけた。

「僕は、小父さんにお願ひがあります。」

「何だね？」

私は、英吉の、次第に個性的なものを示しはじめた顔を眺めかへした。英吉の端正な容貌はその眉と目とは小夜子に生寫しだつた。高く通つた鼻梁と、少し厚目な唇とは、あの井上家の傳統的な特徴を示して、祖父の彌右衛門爺によく似てゐた。そして、がつしりとした顎のあたりに父の嘉市のそれを思はせた。

「小父さん、僕、中學をやめてはいけませんか。」

「何故だね。何故、中學をやめるのだね？」

英吉は、ぱつちりした眼の、長い睫毛を伏せてうなだれてしまつた。私にとつて、これはあまりに意外な提言だつた。若しかしたら英吉は、私の負擔によつて通學するのをいさぎよしとしない氣持になつたのではないかとも私は思つた。

「僕、少年義勇軍にならうと思ふんです。內原の訓練所へはひりたいと思ふんです。」

眉をあげ、眼をみはり、英吉は決然とした調子でかう云つた。

「うむ。內原の訓練所へはいつて——。ちや、君は、滿洲へ行かうと思ふんだね？」

「え、、滿洲へいつて開拓をやり度いと思ひます——僕は、矢張——」

英吉は少し躊躇したが、

「お父さんのところへ行き、お父さんと一緒に百姓をしようと思ひます。」

お父さん——といふ言葉を、英吉はこれまで一度も唇に上せて見せた事は無かつた。それを今は、つきりと然う云つたのである。

「うむ」

私は心のよろめきを感じながら、

「滿洲のお父さんが、來いと云つたのか。」

「い、え！」

と、英吉は強く首を振つて、

「滿洲から何とも云つては來やしません。これは、僕が自分で考へた事なんです。」

「君が自分で考へた、うむ。」

私は改めて英吉の顏を見互さずにはゐられ無かつた。これが、いくら賢いとはいへ、まだ十四になつたばかりの少年の分別であらか？　いや然うでは無い。血の促しなのだ。井上家代々

の血がこの小さき者を、此の決心にまで驅り立てたのだ。

「小父さん、是非僕を滿洲にやつて下さい。」

英吉は、一生懸命の願ひを籠めて云つた。

私は眼を閉ぢた。瞼の裏に、小夜子の顏があらはれた。（小夜子さん、どうしたらいゝのです？）と、私は小夜子に向つて問うた。小夜子の答へは次のやうなものであつた。（邦夫さん、どうぞ、此の子の願ひをきゝ入れてやつて下さい。英吉は滿洲にやつて下さい！）

つづいて、私の瞼の裏にはあの彌右衞門爺の顏があらはれた。（邦夫、英吉は滿洲にやつて呉れ、滿洲の廣い土地の上に、もう一度井上家を打ち建てさせてやつて呉れ。賴む！）

「うむ、さうか」

と、私は英吉に云つた。

それほど君が思ひ込んでのなら、私はとめはしないよ。」

「內原へやつて下さいますか。」

英吉は、ポケットの中から、訓練所の規則書をとり出して私の前に置いた。私の知らぬ間に英吉は一切の用意をとゝのへてゐたのである。

私は、英吉を訓練所にやる事にした。妻は、

「まあ、だつて、かあいさうぢやありませんか」

さう云つて反對した。英吉がすつかり氣に入り、母代として英吉を愛してゐた私の妻は、いたいけな英吉を、滿洲になどやり度くないと云つて、しきりに不同意を唱へたが、

「一人で行くのぢやないよ、親父のところへ行くんだ。そして、あの子には、あの子のお母さんがついてゐる。小夜子さんの靈があの子に添つて、あの子を、滿洲へ――あの子の父のゐるところへ、伴れて行かうといふんだ。何も、心配する事はありはしないよ。」

私はかう云つて、妻を說得した。

內原訓練所で二箇月の訓練をうけ、英吉が渡滿したのは、その年の秋のはじめであつた。現在、彼は、滿洲の某訓練にあつて、少年義勇隊としての鍛錬を重ねてゐる。そこは、嘉市の居る開拓村からさう遠くはない。

たづねて行つて、英吉にあつたといふ嘉市からの手紙を、私は最近に受取つた。

（あの子は私にお父さんと呼んで呉れます。私は小夜子にとつてどんな夫であつたかを省る